
IRREGULAR 《違法異世界旅行者異聞録》

6 1 6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IRREGULAR《違法異世界旅行者異聞録》

【Nコード】

N2685S

【作者名】

616

【あらすじ】

シエアNo.1老舗魔法杖職人の家に生まれながら、魔法が使えない魔女エリカ。美少女の外見、淑女の物腰、豪快すぎる気質、巻き込まれた筋書きという名の運命…「なにそれめんどくさい」ラスボスはヤンデレストーカー系神様（自称）。友情！青春！家族愛！巡る策略、裏切り、戦いの歴史に、権力と禁断の恋、血で血を洗う愛憎劇？

挿絵付き。苦手な方は『挿絵機能をオフにして』ご覧ください

（前書き）

挿絵／本文共に、作者616（陸一 潤）制作。

挿絵機能をオンにして閲覧することを推奨します。

画像・本文、すべての転記を禁止しています。

ブログ：<http://ameblo.jp/ume-6/>
みてみん：<http://157.mitemin.net/>
ついたー：<http://twitter.com/rikuiti>
ぴくしゅ：<http://www.pixiv.net/members.php?id=3607269>

ついたー『IRREGULAR』専用タグ：[#narrow26855](https://narrow26855)

【登場人物一覧】

・根積【生神様】

・根子【神子様】

・魔女【世界を変える】

・エリカ・A・クロックフォード【主人公その1にして、ヒロイン。
魔法の使えない魔女。】

・アイリーン・クロックフォード【エリカの母】

・じい様【アイリーンの義祖父。エリカの義曾祖父】

・ベンジャミン・ライト【エリカの幼馴染。天才】

・フランク・ライト【ベンの父。エリカの両親の親友。貴族】

- ・ビス・ケイリスク【主人公その3。第六部隊隊長】
- ・ダイモン・ケイリスク【ビスの父】
- ・ロキ・ケイリスク【ビスの母。本の一族】
- ・ステイル・ケイリスク【ビスの兄。】
- ・おばさま【ダイモンの養い親】

- ・東シオン【エリカの父。喫茶店長】
- ・虹【語り部。喫茶バイト】

- ・ミス アンブレラ (Miss Umbrella) 【情報屋】
- ・クリスチャン (Christian) 【アンブレラの養い子】
- ・エルディア (El) 【女装趣味】
- ・リユー (龍) 【神子。ネガティブ】
- ・志村明【関西人】
- ・小鳥遊忍【関西人】
- ・小嶋凛【大学生。双子の兄。人魚】
- ・西藤 爛【女子大生。双子の妹。】
- ・アン・エイビー (Ane Ab) 【快樂殺人鬼】

- ・アリス・リデル【ボス。神様の子。とある世界の独裁者】
- ・テシャー猫【アリスの夫。殺人鬼】
- ・ハートのQ【女王様。人間最終兵器】
- ・ハートのK【Qの弟。】
- ・シロウサギ【男装少女。Kの婚約者。】
- ・ジャック【Qの世話役】
- ・イモムシ【情報担当】
- ・帽子屋【人間。教育係。】
- ・ヤマネ【人間。ハッカー】
- ・三月ウサギ【人間。神童】

- ・ハンプティダンプティ【人間。元・神童】
- ・トウイードル・デイ【不在】
- ・トウイードル・ダム【同上】
- ・ハートのA【新人】

- ・羽の生えた猫【黒髪赤目の女】

- ・夜ネズミ【NYXリーダー。赤毛黒目の男】
- ・グリム【闇医者。毒師。廃墟マニア】
- ・ダルタン【吸血鬼】
- ・ジジ【目隠しの子供】
- ・トト【目隠しの子供】
- ・魔法使い【願いを叶える存在】

- ・ロメロ・パスカル・ミル・エラ・ピーター・アンジュ・アントン・S・Z・ミアロ・二世【物語管理局局長】
- ・第一部隊隊長【第一部隊隊長。有能】
- ・トム・ライアン【第二部隊隊長】
- ・ミゲル・アモ【第三部隊隊長。元ジャーナリスト】
- ・サティ【第四部隊隊長。】
- ・ソフィア【第五部隊隊長。元教師】

- ・ニル【エリカのパートナー】
- ・ファン【晴光のパートナー】
- ・チャック【行方不明】
- ・管理人（墓守）【語り部】

- ・朱羽【片翼の一族】
- ・蒼羽【片翼の一族。朱羽の妹】
- ・ばば様【片翼の一族】

- ・照朱郎【雪女。朱羽の孫】
- ・人魚【水子沼の人魚】
- ・狐【関西弁】
- ・しょうけら【猿面の男】
- ・夜雀【不幸体質】
- ・座敷童【ひきこもり】
- ・幽霊【人間。】
- ・犬神【照朱郎の親友】

- ・佐藤 幸一【語り部】
- ・七島 空子【語り部】

- ・周 晴光【主人公その2にしてヒーロー。バスケット少年】
- ・三浦 朝子【晴光の幼馴染】
- ・東 昌子【シオンの妹】

- ・泉ソフィ【魔女】
- ・泉秀（アラン）【研究者】
- ・サラ・ポピンズ【魔女】
- ・美島 百合【泉の娘】
- ・美島 純【百合の夫】
- ・美島 聖女【その娘】
- ・アオイ・バンクス【孤児】

以下、
69名。

一作目：鳥頭の発見

さて、事の発端はこれだったか。

> i 3 6 0 2 0 — 1 5 7 <

アスカという人間は、しがない院生であつた。
大学で研究に明け暮れる日々。『それ』が出来たのは、まさに偶然としか言いようがない。

『異なる世界を目視する装置』。

発毛剤を作ろうとしたら不老不死の妙薬になつただとか、バナナを温めようとしたら電子レンジがタイムマシーンになつてただとか、そういう類の偶然だった。不可思議なる『現象』、『奇跡』と言つたほうがいい。

そしてアスカはあれよあれよと時のひと。

もともと、異世界の存在は証明・認知されていた。小さな偶然の発見は人類の夢と、さらなる技術を呼びこんで飛翔する。

たった四十年。アスカが還暦を迎えるころ、『異世界へ行く技術』が実現した。

さて、人類さらなる高みへいざゆかん。

113歳。晩年のアスカは自伝でこう語る。

『私はとんでもないことを仕出かしたのだと、涙を流して神様に頭を下げました』

人々は言った。これまでの人類の発展は、このためにあったのだと。

異世界旅行はかつての天空にある月の地のごとく、世界の夢と希望の象徴として掲げられる。

異世界から持ち帰ったアイテムで、その世界は急速に発展した。

大人は寝ていても一日の用事を終わらせることができ、子供は健康に、よく生まれるようになった。

そしてついに、西暦2000年歴の終わりの間近。異世界探査員が見つけたアイテム。

それは……………。

「かの高名なるアスカ教授の自伝 軌跡 の一文が、物議を醸しています」

『私はとんでもないことを仕出かしたのだと、涙を流して神様に頭を下げました。私が偶然に愛されたしがない院生でいれば……いえ、ただの親のすねかじりの馬鹿だったなら、この世界がここまですで変わることなど無かったです。（中略）』

私はあまりに苦々しい気持ちでいっぱいです。愛しい私の世界の

皆様、感謝と、そして言葉しか捧げられない私を許してください。
ごめんなさい』

西暦2000年歴の終わりも間近。異世界探査員が見つけたアイテム。

それはまさに、世界のリセットボタンだった。

異世界では、羽も生えそろわない子供がくわえているような玩具だったという。

探査員は息子に夢の詰まった玩具を与えるつもりで、その小さな手の平に収まる物体を持ち帰った。

世界に急速に広がる波紋。母なる星を包むその波は、破滅そのものだった。

世界が緩やかに死んでいく最後の時…世界中に、延命装置で縁取られたアスカの言葉がこだまする。

『ごめんなさい』『ごめんなさい…』『ごめんなさい…』

アスカ老人はベットの上でほろほろとクチバシを伝って涙を流し、羽根の禿げた頭を下げた。来るべき時に腕の産毛が逆立ち、ぞわぞわと身を震わせる。

途方もない後悔。人生115歳、世紀の大発見をして91年の長き時を見届けていたアスカは、発展していく世の中に言い知れぬ恐怖を感じていた。

溜まりに溜まった者が、あついに…弾けてしまったのだと。

飛鳥アスカがその小さなきつかけを見逃すほどの頭だったなら。知識も何もないただの若者だったなら…。

この世界で『人間』と呼ばれる鳥たちは、その声を誰に聞かれるでもなく、^{おじそ}敵かに消滅した。

小さな偶然を発見してしまった飛鳥も、兵器を子供のおもちゃをして持ち帰った探索員も、ああこれ全てがホントの鳥頭。

——合掌——

さて異世界は数多あるわけで、けれど『自由に世界を渡り歩く』なんて技術はどの世界の文明でも（たぶん）まだ生まれていなくて、そんなさまざまな異世界を渡り歩く若者が一人だけ世界の最期の時に立ち会った。

若者はさまざまな世界を見てきた。そして驚愕する。これほどまでに文明の発達した世界は初めてだ、と。

もともと自分のように異世界を渡り歩く『体質』があるわけでもない。ただの一般人が、さまざまな世界へ行って帰ってくる。これはすごいことだ！

けれどその世界は滅んでしまう。なんてもったいないこと。若者は『異世界へ行く技術』を持ち出し、自分のものにした。

仲間を集めて徒党を組んで異世界へ送り出す。さまざまな世界があるのだ、石ころが宝石になる世界だって探せばすぐに見つかる。ゴミでも死体でも場所を変えれば宝と同じ。

若者は財を得た。

ゴミでも死体でも場所を変えれば宝と同じ。人間だってそうである。あの世界で『ニンゲン』として生きていた鳥たちももちろんのこと。若者は中年となり、ただの男になっていた。老いていく体に危機

感を覚えだしたところ、ついに見つける。

『不老不死』！！

それは小さな世界の片隅で、ひっそり生きている民族の血肉。どんな力でも増幅剤となる妙薬。力と言っても様々ある。筋力、視力、思考力、精力、生命力ETC。ああありがたや、と彼は……。

ゴミでも死体でも人間でも、場所を変えれば宝と同じ。その一族の『増幅剤』となる能力はどこでも高く売れた。

彼らは『異世界管理局』と名乗り、文字通り『世界』を『管理』しだったのである。

いつしか男は非道と言われ、そして男に立ち向かわんとする集団が出来て――。

男を討ち取った集団は、新たなる『異世界管理局』という組織になった。『異世界を管理』するのではない。『異世界を犯すものを管理』するのだ。

世界にはその世界の住人達がつむぐ『筋書き』が存在する。『筋書き』というあるべき歴史は犯してはならない。その一線は越えてはならなかったのだと彼らは誓う。

ああ、けれど男たちが縦横無尽に荒らした世界に後遺症が残ってしまった。どの世界の『筋書き』にも属さない、あの男のようにあらゆる世界にも馴染めない人々。生まれながらに『筋書き』を歪めてしまう人々。

異世界管理局は彼らに名前を付けた。『^{イレギュラー}異端者』。筋書きに無いもの存在。

イレギュラー
異端者を集めたもう一つの組織が出来上がる。筋書きを守る組織、
『物語管理局』というものである。

さてこれは、そんなイレギュラー異端者達のお話です。

さて、この世はかくもおかしい“物語”によって綴^{つづ}られている。

世界にはたくさんの物語が存在する。それは実在の人物の人生をなぞった、本当にあった物語の場合もあるし、人の頭の中で出来た、空想が転じた作り話ということもある。

しかしすべてに通じるのは、それが人間という生き物が、人間にしか持つていない力を持って作った“物語”という一つの法則だということだ。

逆に言えば、先の物語にあった鳥人間たちの様に、それを行える者こそが真に人間という生き物のくくりに入るのである。

考える頭のある君たちは、思ったことがなかるうか。

物語が持つ一つの力。そこには——たとえば、その読み終わった紙面の上にはほしいものがある、何かを得たと。

知識、疑似^{ぎじ}的な経験、そして何より希望も、いくなれば夢というものを得たことは——？

この世は、かくもおかしき“法則”によって綴^{つづ}られている。もしもの話だが、僕にとっては真実だ。

この世界がもし、誰かが考えた“物語”の中だったとしたら——

——君という人間が、もしその物語の登場人物であったとしたら——

——君の人生が、知らない誰かの手によって考えられたもので、物語として読まれているとしたら——？

悲観してはいけない。これは例えば、先に言った、物語世界に必ず存在する夢や希望というものが、君たちの世界にも必ず存在しているということなのだ。

そして、その物語を綴った“誰か”もまた、別の“誰か”にかがれた物語の中の人間なのだ。

みんな同じ。日本で生活しているだろう君は、この言葉に多大な安心感を得るはずだ。

こう考えるといい。君に起きた不平等や不条理や理不尽も、すべては“誰か”が考えたものなのだ。それは神様などではない。君と同じ、ただの人間。

人類みな兄弟などとは言いはしないが、いるかもしれない神様よりかは、よっぽど信じられるとは思わないだろうか。

そして、この世はかくもおかしき“物語”によって綴られている。しかしながら、最近はあるのだ。誰の物語も描かれなかった、いるはずのない存在というのが――。

二作目：夢見るネズミと、大好きな聖女様。

> i 3 6 0 1 9 — 1 5 7 <

カンカンカンカンカンカンカン……
警報 警報

海沿いの街。神社の手前にある踏切。しましまの遮断機が目の前を降りていく。赤いライトが、チ力、チ力、チ力、チ力……

「私は、貴方のために死んでやるのよ」
彼女はそう嘯うそぶいた。

「これまでも、これから、今回も。貴方のために私はいつだって命を落とすの。ねえ、わかる？ 貴方のせいで死ぬんじゃないの。私が、私の意思で、貴方のために死ぬのよ」

首の後ろから、全身がどつと冷たくなった。

「あなたがわたしにそうさせるの」

アスファルトに横たわる女はしっかりとした口ぶりで、悪いことをした子供を叱しかるように微笑みすら浮かべて見せた。

けれど転がる出刃包丁が、脂と血で生々しく濡れそばって光る欠けた刃が、すべて知っている。

——けれど、彼女を刺したのは僕だ。

「貴方のために私は死ぬのよ？愛する夫を置いていくのも、ここに
いる…かわいいこの子を道ずれにしないといけないのも、全部。ぜ
んぶ、貴方のため…」

女は膨らんだ腹を撫でる。あくまでも愛おしげに、見せつけるよ
うに。

男は長い時を生きてきた。彼女と生きるためだけに、その生を永^{なが}
らえてきた。不老不死のその体はまさに神の所業である。けれど、
だからといって何をするでもない。ひっそりと、隠れるように永遠
の時を消費するしかない。

彼の生きる意味は彼女だった。輪廻に組み込まれた彼女を守るた
めだけに彼は生き、彼女が生まれるたびに彼女に寄り添い、いつだ
って短命で終わる彼女の世話をしてきたのだ。

彼は何百年も、何千年も何万年も、体で彼女に尽くす。彼女は心
で尽くすことで彼にこたえてきた。

—— 僕の一番は彼女で、彼女の一番は僕。彼女は不幸
と病に愛されている。ああ、だから僕が守ってあげないと…

そんな彼女が、どの生でもどんなに尽くしても病床しか上がれな
かった彼女が、今度は健康な体であまつさえ—— 知
らぬ男の子を宿している。

しかし彼女はまた死んでいくのだ。
彼女曰く。「自分のせいで」

彼女は小さく苦しげにうめき、大きな腹が窮屈そうに体を丸めた。

「…許さないわ」
彼女がささやく。

「許さないわ、絶対に。今度は私の命だけじゃない、この子たちまで貴方は奪う。…許してやるもんか、忘れるなよ。…覚えてろ」
にまあ、と彼女は僕に笑いかけた。

「私は貴方のせいで死んだのよ。貴方が私にそうさせてきたの。貴方が私にさせてきたのは生きることじゃない。貴方のために死ぬことだけ。何度生きても、もう私は貴方を許さない。許せないわ。これから先、この子たちが生きるはずだった時がたつほどに貴方の罪は増えていくのよ。だから私は、もう一度だけ貴方のために死んで最後にする……」

真っ赤な彼女の瞳が濁る。

「ふふ…ころしてやる、うらんでやる、のろってやる、つぶしてやる、じごくにおちろ…」

数ある恨み言をもにゃもにゃと呟いて、彼女はうごかなくなった。

何度も見た彼女の死。――彼女はまた生まれ変わる。

でももう、僕を愛してはくれない。

カンカンカンカンカンカンカンカン……

警報 警報

今更ながら踏切の警戒音が頭に届く。電車が切る風が、彼女の黒髪をさらっていく。

通り過ぎる窓の中の誰かさんが彼女を指さして、ガラス越しに無音の何事かを叫んでいた。

僕は今までで一番重い彼女を抱きかかえ、ゆっくりと世界の外へ

と歩き出した。

君の思い通りになったよ、根子。^{ねこ}根積は…^{ねずみ}僕は、君を忘れられなくなつた。幸せだった今までと同じように、かわいそうな君の最期を鮮明に思い出す。

ねえ、根子。僕はこんな最後は駄目だと思っただ。君は僕を裏切ったけれど、それは忘れてあげるから。

そうだ、ねえ、根子。

ねえ

三作目：魔法使いの国 魔法使い杖専門店『銀蛇』（前書き）

はてさて、主人公の一人である彼女を語るには、まずは彼女の生い立ちと、ついでにこの世界の世界観を語らおう。

三作目：魔法使いの国 魔法使い杖専門店『銀蛇』

7<

> i 3 6 0 1 7 — 1 5

僕らでいう処の『英国』に似た風情。魔法使いの国。彼女はその中心都市の一番の商店街に店舗を構えている、ボロの（しかし老舗の）杖職人の家に生まれた。容姿も人並み以上、活発にして利発、人生を最初から最後までそれなりに愛され生きてきた。

しかし彼女に難あるというなれば、その中身に他ならない。私は彼女を【利発】と称したが、それは頭の一部を除いて、のことである。

もし貴方が彼女に逢い会話したなら、きっとニコニコと人当たりのいい作り笑いを浮かべていることだろう。

話しているうちに、拗ねたような、少し怒ったような、そんなむつりとした無表情になれば少し仲良くなった証拠。

終いにボーツと、あらぬ場所を見つめている姿を貴方にみせれば、それは彼女が貴方に心を許したということである。

か
の
じ
ょ
真実を知っている人は言う。【彼女は変人だ】。

しかし不可思議なることに、秀逸な職人芸で本性を塗り固める彼女と直に接した人はいつだって、よほど捻くれていない限りは高評価を付けられる。

【容姿が良くて、文武両道才色兼備の白眉の娘】
本当なら【しかし変人】とつくべきだが、いかんせん彼女は歴代

の【変人】達とは違い、コミュニケーション能力に特化した変人であるので、いつだって【あしからず】となったのである。

さて、まずはエリカの、傍^{はた}から見れば不遇な生い立ちについてお話しようか。

エリカの生まれは、英国に似た魔法使いの国。その中心都市のメインストリートの商店街で一番の杖職人の店の一人娘である。

クロックフォードなどという珍妙な苗字は、職人としては一流だが教養は無い祖父に、孫として拾われた母が適当に付けられた名前だ。

優秀な職人の店であつたが、小さな店は（外観的に）傾いており、入り口すぐの廊下の両端には本と紙束と、よくわからない薬品の瓶が詰まった埃のかぶつた棚が迫る上に、窮屈な廊下を抜けた先の力ウンターは、商品の箱が積んであつて役割を果たしていないという『魔法使いの杖ここにあり』との『銀蛇』ブランドの店とは思えないものだつた。

魔法使いの杖は子供が生まれて一度も切っていない産毛を切り、それを木の芯に詰め、特殊な加工を施して聖銀で覆い、魔法のコーティングをして、一人に一つのオーダーメイドの杖が出来上がる。

この製法を『銀蛇』といい、エリカの生家『銀蛇』はこの杖製造技術を作り上げ、どこよりも優れた技術で誉^{ほま}れ高い店なのである。

しかし生活も庶民と変わらず、むしろ質は悪い。倅約家で職人氣質の曾祖父によるものだったが、エリカはまさか自分の家が、この世界中から注文を受ける程の大手だとはこの8歳まで信じていなかった。

曾祖父と母との三人暮らし。先代の曾祖父は職人としては退き、

母のアイリーンが店の主人だ。

父は生まれた時からおらず、聞くとところによるとエリカが生まれる一月前に失踪したのだという。母もまた親無し子。曾祖父とは血が繋がっておらず、拾われて孫として育てられ、今や郷では【杖専門店銀蛇】の名は知らぬほどの職人である。

さて、子供が生まれる一月前に行方不明になったエリカの父であるが、不思議にも父を悪く言う者はいなかった。父も身寄りがおらず、休みにのみ【銀蛇】に居候という形で部屋を借りていた貧乏学生だったのだが、気が優しくて不器用、根が真面目で・・・と、まあ、評判だったのだ。

ついでに言えば、エリカの美貌は父譲り。小綺麗な女顔の実直な少年は、商店街の隠居爺婆いんきよばを中心に人気と信頼が著しく、奇しくも父の失踪を批判したのは一人孫が大切な曾祖父のみで、エリカは曾祖父の実父への愚痴と、近所からのポジティブな噂話を聴いて育ってきたのである。

エリカの父への認識はこうだ。『何かの不幸』に巻き込まれた“可能性”のある行方不明の“母の”夫』。

父親の顔なんて、今はどうなのかは知らない。けれども、自分の顔を鏡で見れば、良く似た造形をした模造品がそこにある。写真はあるがどれも若く、母は良くもまあ、こんな女顔のチンチクリンに惚れたものだ、と思う。10年以上たってても、父のことを愚痴り続ける曾祖父を見ては、ハイハイそうね。喧嘩ばかりしてるくせに、けっきょく孫がかわいいのね。と、空気を吸うのと同じように相槌あいづちを打てる。

しかし問題は、ご近所の商店街の皆様である。

あの人たちは父を褒めることしかない。すこし出来の悪い孫や子供や兄弟の話をするような感覚で、貶^{けな}して馬鹿にしては『あいつは本当に馬鹿で不器用だけど、いいやつだったなあ』などで終わる。思い出話はヨソでやってよ、というのがエリカの本音だった。エリカの姿を見かければ引き止めその場に座らせて、あえて父の話をすることもあるまいに。顔と名前しか知らない人間の知識など、歴史の授業じゃないんだからいらないでしょう？

そんなエリカには、いくつかの悩みがあった。

一つは件^{くだん}の余計なお世話。さて、残りは幼いある日の、友人との出来事で説明しよう。

魔法使いの国 幼馴染

両親共通の友人に、フランク・ライトという男が居る。学生時代の父・シオンの親友で、凡庸な顔立ちのメガネの男である。

魔法使いの国と言えど、魔法使いではない、他国から移民してきた普通の人間もいる。フランクは半分は代々の魔法使い貴族、半分はそういうただの人間の間生まれた貴族分家の魔法使いだった。

性格は見た目通りの育ちのよさそうなボヤヤンとした中年男性である。温和で真面目で、唯一の趣味は仕事と読書、特技は水の魔法と子守り。三十路手前で、周囲には隠居じじいの様だと言われている。

早くに許嫁と結婚して、同じく卒業と同時に結婚したエリカの両親とは現在も交流が続ぎ、エリカと同一年の息子もいる。

エリカはこのフランクが好きだった。エリカの母とは男女を超えた固い友情で結ばれているので、本当の父親になるわけはなかったが、父無し子のエリカにとっては、いない父より父も同然。

『特技・子守』と言うだけに、底抜けに優しくエリカの話も最初から最後まで聞いて、同じ目線で会話してくれる。普通より少しだけ聡いエリカを、子ども扱いはいしない。

動物と子供には好かれる男。それがフランクだった。

そしてその一人息子・ベンが、今回で言う『友人』である。

友人という響きには、いささか大人っぽさが漂う。10歳にもならないエリカたちには、『ともだち』という単語の方が近いだろう。同い年の幼馴染ともだちは、とにかく気が強かった。エリカはもちろんで、ベンもそうである。お互いに負けず嫌いの頑固者。

ただ、ベンのほうが年相応の男の子らしく甘えん坊ということもあつて、姉と弟のような関係だった。

彼も一応は上流階級の生まれである。魔法使いの子供は、10になるかならないかで杖を与えられ親や寺院、学校で魔法を習うのだが、彼は8歳にして教育として魔法を扱うことが出来た。とみに炎の魔法は、小さな火種くらいなら杖なしで出せる。これは才能を持った大人でも難しいことだ。

彼の杖も、もちろん銀蛇製法の銀蛇ブランド。オーダーメイドゆえその人によつて、ぐねぐねと…またはゆるやかに曲がる銀色の透き通る杖は、持ち手がレバーの様に90度に曲がっていて、らせんを描くバネか、とぐろを巻く蛇の様にぐるぐるの形だった。

彼の手にはずっと大きいそれを、ベンは腕に蛇を巻きつけるようにして得意げに相棒を扱っていた。

まあ、エリカの前以外で、だけれど。

エリカの悩みその2。エリカは魔女なのに、魔法が使えなかった。エリカも杖は持っている。けれど、それは直立するようにまつすぐの形をしている。ベンの様に杖が曲がるのは、生まれ持った魔法がいかに強いのか、という証だ。

杖とは避雷針の様に魔力を集めて放出する道具である。

えしかしエリカには、避雷針が集める魔力すら無いということになる。

周囲は色々言う。特に年の近い子供なんて明け透けた。

『魔法が使えない子』、『移民の子』、実際父親の出生は分からないわけだし、反論の仕様が無い。あと、子供がそういうことを言うということは、親も陰ではそういうことを言っているということだ。酒屋の優しいオバさんも自分を憐れんでいるから優しくする…なんて、エリカの様な子供が気をまわすことではないのだけれど、エリカは気付いてしまう。子供は気付かず、ただ与えられた親切を喜ぶのが一番良いのに。

だからエリカは、近所のお節介なアレコレが嫌いなのだ。魔法使いの街で魔法使いの杖を作る店に生まれて、魔法が使えない。これはエリカが大きくなってから、それこそ自分を分析し理論整然と語ることが出来る年頃になってから言ったことだが…それは不便だと不幸じゃあない。

この商店街のすぐ裏手には、スラムがある。夜になると、明かりに群がる羽虫と一緒に出てくる女達や、名もない子供がいるのを知っている。

曾祖父は嘆く。

「それは大人の、それもよほど意固地でひねくれた奴の考え方だ。お前は両親から扱いが難しいものばかり継いでいる…じい様は、お前のそんなところがお前の才能^{ひね}うんぬんよりも不憫でならないよ…」
そういつじい様も、近所じゃ捻^{ひね}くれ爺と噂されているのだけれど。

魔法使いの国 始まり始まり

さて、始まりはいつも雨ではなく、始まりはいつも突然である。エリカ自身はよく覚えていないが、それはあれで頭のいいベン少年の証言から状況を説明できよう。他にも目撃者はいたが、彼ほど実のある証言は出来なかった。

これから語る出来事が、エリカの三番目の悩みでかつ、彼女の人生を大きく変えた事柄の発端だ。

ベンこと、ベンジャミン・ライト少年、小柄なエリカよりさらにチビで、かつ気の強くて短気なので、近所では有名なガキ大将である。

しかし一応お貴族様で、一応、神童やら天才児やら言われているエリカの幼馴染である。

その日もエリカは、商店街のスラム街の境にある路地で苛められていた。いつもは二人か三人、エリカより少し年上の奴らに『ブサイク』『チビ』『貰われっこ』『アホ』『馬鹿』『間抜け』等のあらぬ暴言を吐かれる（もちろん、彼女を知る貴方方はお分かりだと思う）のだが、今回は様子が少し違う。

今回は『少し年上』どころか、どう見ても一回りは上の青年五人組だった。さらには、明らかに酒臭い。どこぞの道楽不良息子の集まりだろうか、衣服は小奇麗なものだし、まだ二十歳ハタチに届かないくらい若いのに、立派に破落戸コロシキの風情である。

ぐるりと囲まれたエリカは、小さくなつて警戒の目を向ける。

ニヤニヤとエリカを囲む若い男達。さらに若いエリカ。この文章だけ見ると、まるで学生の校舎裏告白シーンのようだ。こいつら口リコンか？

「おい、こいつ見るよ。チビのくせになかなかいい顔してるぜ」

「こいつ知ってるぜ。その『銀蛇』の一人娘だつてよ」

「スラムの娼婦から買われたつて噂だぜ」

「銀蛇？俺も銀蛇製の杖だぜ。すげえな、俺んちより儲けてるんだろ」

「そりや当たり前だろ！こいつも杖作れんのかな？銀蛇だけの企業秘密つてヤツ、あるんだろ？老舗だから英才教育でさあ」

「さあなあ、でも俺知ってるぜ。そういうオプシオン付くと、いい小遣いになるんだよ」

「へえ…美人だしなあ…」

とんでもないことを言われている。

とんだ道楽息子たちだ。『イタズラされる』レベルのことではない。このセリフを聞けば、親は泣くどころか、卒倒して一家心中を考えるだろう。

しかしこの少年たちが、素面すめんでそんなことを言える人間には、エリカの幼い目にも思えない。しかし、その場の酒のノリで売り飛ばされてはたまらない。

エリカは逃げる算段を考え始めた。スラム近くの路地裏。袋小路なので、後ろは壁、左右も壁、正面も少年たちがいるのである意味で壁。相手は一回りどころか、三まわりは体も年も上で、それが五人…。

（無理だ）

エリカの結論は早かった。（助けを待たなきゃ）
冷や汗が出てきた。ついでに、涙腺も緩んできた。下唇を噛んで耐えた。

ベン少年は、それを袋小路の入り口から見ていた。ちょうど、エリカのいる銀蛇に向かうところだったのだ。

身なりのいいチンピラ達が、袋小路で何かしら囲んで、やんややんや やっていると思えば、囲まれているのは大事な幼馴染だ。（助けなきゃ、なんとかしなきゃ）

あたりに通行人はいない。

ベンは魔法に自信があった。杖を取り出し、とぐろを巻いたような形のそれを、いつも通り腕に巻きつける。

一度、ベンはこういう場に立ち会ったことがある。あれもゴロツキ相手だった。

父親と二人で、城下の祭りの帰りだった。すっかり夜は更け、ベンもすでに1時間は夜更かしだ。

そこを破落戸に絡まれた。^{ゴロツキ}ベンの父は身なりがいい割に、お世辞にも強面ではないヒョロ長の優男なので、もしかしたらオヤジ狩りだったのかもしれない。

いつもニコニコしている父の顔が強張った。

どこの世でも祭りというのは、大概が無礼講である。子供は合法的に夜更かしできて、大人も…時には成人に近い若者も酒をたらふく口にする。しかし『成人に近い若者』といったら、当然大人には数歩踏み込めていないわけで、周囲の大人の認識は『大人に近い子供』なのである。そんな子供に大人の薬・アルコールを与えるのは、一種の社会勉強でしかない。

けれど大人の薬というのは、頭を鈍らせる効能があるわけで……
ライト親子が祭りの夜に遭遇したのも、そういう輩^{やから}だった。

「オジサン、俺たちに金を貸してくれないか？」

青年たちは緩んだ口調で、当然の様に金銭を要求する。

フランク・ライトは、後ずさりした息子の背を叩いて自分の脇に押しとどめ、いつも通りの柔和な笑みを唇に浮かべた。

「おやおや、今日はどこも明るいが、ここらへんは電飾も無くて暗いもんだね」

不安げに父を見上げるベンの背中をもう一度叩いて、フランクは若者に話しかける。父の無言の叱咤^{しつた}をベンは感じ取った。『いつも通り』に、『堂々としていなさい』。

「さて、私は早く西区の家に帰って、奥さんにこの息子を寝かしつけてもらわないといけないんだ」西区は、貴族の屋敷が多くある街である。

「御用なら、明日にでもご自宅にうかがおうか。君たちのご両親とも久しいことだし丁度いい。ああ、私はライトというものだ。言え、ご両親はご存じだと思われるけれどね」

その文句はまるで魔法だった。みるみる青年たちの顔色が変わる。緩んだ口元はどんどん融解して、表情は迷子の子供の様に頼りなさげになった。

ベンはこの出来事で、はつきりと理解した。自分の家名は武器になる。いざという時の手段になる。それだけの力があるものだ。水戸黄門の印籠だ。ベンは恐らく初めて、この武器を誇らしく思った。ベロベロに酔った青年集団は、丁度あのエリカに絡んできた彼らに良く似ている。いい服を着て育ちがよさそうなところや、素面^{すいめん}より大胆なところ。ただ違うのは、この時の青年らの方がまだ若く、親の手がかかっているのが丸わかり、いたいけな女の子をいじめる彼らの方は、明らかに道を踏み外しているということだった。

「やめろ！」

ベンは今、姫を悪者の手から攫^{さら}う騎士^{ヒーロー}だった。しかしその騎士の名前は、ドン・キホーテなのである。

魔法使いの国 消えたエリカ

『水戸黄門の印籠』と称したのは、いささかここの世界観を壊しすぎただろうか。謝罪しよう。

「やめろ！」

灰色の壁に囲まれた裏袋路地、チンピラに絡まれる美少女を救うため、勇猛果敢にいきり立つベンジャミンの登場に効果音をつけるとすれば、『じゃじゃーん』。

「……は？」

突然登場したがきんちよにぽかんとする酔っ払いだったが、「やめろ！」テイクツー。

再度ベンが畳み掛けると、なんとも言い難い雰囲気になった。現代ネットスラング的にするなれば、『やめろつてよwwwwwwww』『ヒーローwwwwwwwwwスwwww』たじろいだのはベンの方である。ベンはエリカを見た。ここは『助けて！』とでもいうところ。

しかしそこはこの物語のお姫様、エリカ嬢だった。

「アンタばつっ————かじゃないの——！！？」その紅の唇から出た罵倒に、思わずチンピラも一瞬黙る。

「なんで大人を呼ばないのよチビ！ 役立たず！」

ベンは得意だった。『かわいい幼馴染を僕が助ける』その華々しいシチュエーションの空気に酔っていたと言ってもいい。

わかりやすく言おう。ベンは、『萎えた』。気分とか、やる気とか、そういうものが。

そこからはあつというまだった。

ベンはヒョイと片手で抱えられ、あわててジタバタと『ぼくはライト家の人間だ！』と言うも酔っ払いチンピラは当然取り合わない。怖くなってきたベンは年相応に絶望し、泣き出した。

ただエリカがそれを呆れたふうに見て、「コイツに怪我でもさせたら、お兄ちゃんたちウチのママとおじいちゃんと、こいつのおうちの人に殺されるわよ」といつも通りに言ったので、ちよつと落ち着いたのは不思議だ。

エリカもまた、顔色は蒼白だが、自分より取り乱すベンが来たことで少し冷静になっていた。（男の子って駄目ね）それくらい考える余裕は出来た。

しかし打開策が見つからないのは同じこと。今考えるのは、『頼りになる大人』が助けに来ることだ。

小さな頭で考える。誰かしら、このピーピー耳障りに泣いている声を聴きつけてやってこないだろうか。

けれども残念なことに、この絶望的な状況で、この小さな頭が考える程度のことは、酔っ払いの鈍った頭でも行き着くのである。

『耳障り』だということだ。

「うるせえ！」

「きゃあ！」

男が横殴りに少年の肩横つ面を殴り飛ばす。図太いところのあるベンは、さらに大きく泣き出した。「うわああああああん」

子供の泣き声というものは、人間が本能的に『焦る』作用があるのだという。なぜだか『泣き止ませなきゃ』と思うのだ。

「くそつ、黙れ！」

「ぎやつ！」

「やめて！」

また殴る。

「やだ！ なんでもするからやめて！」

ベンの泣き声が小さくなると、エリカの悲鳴が大きくなる。

「ベン！ やだ！ 死んじゃう！ ベンが死んじゃう！」

エリカがオウムの様に繰り返し叫びだすと、エリカを捕まえていたチンピラが手を離れた。

怯えた声。「も、もうやめろよ…死ぬって」

冷たい石畳に膝をついたエリカは、自分以外のその声にパニックになった。自分は『死んじゃう』と口走った。この人も『死ぬ』と言った。

それは、それはとても、とても――

いっわい。

エリカ・クロックフォードは、その日、街から消えた。

魔法使いの国 荒野

その時何が起こったのか？

エリカは自室の窓に頬杖を突き、通りを見下ろしながら、8歳児にしては大人っぽい溜息を吐いた。

「はぁ……」

階下から、母が自分と呼ぶ声が聞こえる。

「はぁい」

返事を返しながら、エリカはその『感覚』に「ああまたか」と思った。視界が失せる前に、靴をひつかむ。履物を何かしら無いと、うっかり足を切ることもあるのだ。返事はしたもの、結局自分は母を手伝えない。

次の瞬間にエリカが見たのは、なだらかな丘に、白い廃墟の群れが肩を寄せ合う荒野の景色である。

さて、エリカの三番目にして最大の悩み事。
あの日から始まった、『エリカちゃん消失現象』だ。

いつのまにか消えて、いつのまにか帰ってくる。

それだけのことだが、最初の時は散々だった。

消えた少女にチンピラは大狂乱。息も絶え絶えにその場を逃げ出し、二発殴られただけですんだベンの証言で、自宅にいるところを捕まった。

銀蛇とライト家総力をあげてのエリカ搜索が始まったが、エリカが見つかったのは日の出前、明朝の路地、あのチンピラに追い込まれた同じ場所で、同じ格好で見つかった。

これを君は何と？ 『神隠し』。そう、それだ。

エリカはその日から、ほぼ十日に一度、『神隠し』に定期的に遭う体質になる。

エリカのそれは、気付けばぽつねんと荒野に立っているだけの現象である。

荒野と言っても様々で、人のいない荒れ果てた土地——というだけで、陽に照らされた砂漠、地面がひび割れた肌寒い土地、ひよろひよろ細長い枯れ木だけが生えた赤土の地、時と場合を無視して、昼や夜や黄昏、または暁を見ることがある。

共通するのは、『人がいない』ということだ。

いや……一度だけあったか。誰かに会った、一度こっきりのことが。

魔法使いの国 闇

エリカはまず、靴越しに砂利の感触を感じた。靴底を地面にこすると、小石が足の裏で転がる。

あたりは星も月も無い真っ暗闇。やはり、エリカはいつも通り一人だったしで、気丈な彼女も途端に気弱の沼に落ちた。

いった気持が淋しくなると、泥にズブズブ足を取られるように、後から先に沈んでしまうものである。

自分の指先すら見えない闇で一人きり、さて皆様方は気を強く持てるだろうか？

「うええ……」

エリカは泣きべそをかきながらも、自分のするべきことをした。

10歳にもならない少女としては、この状況で最善の策である。

そつとしゃがみ、むき出しのひざをつかないように地面の小石にさわる。下がただの砂利道であることを確認し、耳を澄ませてあたりを探る。

水音がするならここは川だ。そして、石が丸ければそれは川の石だ。

エリカが触ったのは、角ばってチョークよりいくらか硬い脆そう

な石だった。削り出したか、崩れたか、むき出しの断面ばかりだ。一面だけつるつるすべししている。

そしてその小石の下から、細長い雑草のようなものが生えているのも分かった。これにはすぐ手を引つ込める。

毒草ならば、素手では危険だからだ。むやみに『触らない』『近づかない』『関わらない』は、魔法使いの子供の最初の躰しつけで教えられることである。何せ魔法使いの国、一口に『毒草』といってもピンからキリまで。キリまで行くと常軌を逸しているレベル。薬草に擬態する触れただけで人死に出る劇草で、毎年モチで窒息死くらの被害が出る。

エリカはいくつか小石を手にとると、前方に一つ、右に一つ、左に一つ、後ろに一つ――と放ってみた。

音を聞いて、『実はこの先断崖絶壁』だとかいうことが無いようだと確信する。

いつものエリカならば、ここで終わって、静かにこの場で帰る時を待つ。帰る時もまた、唐突に、瞬きのうちに移動するのだから。慣れているので、冷静なものである。

しかし今回は勝手が違った。何せ瞼まぶたを閉じた時よりも深い闇の中だ。風もなく、耳の奥では、オウオウと唸うなるような自分の血の巡りの音しか聞こえない。これでは、ここは死の淵ですかと大人ですら泣き叫ぶ。

人間、陽の下で生きるようにできているのだ。この現象の原因を知っていても、エリカが耐えられるはずもなく、『迷子は動くな』の鉄則を破って、ポケットいっぱいすに小石を詰めて摺り足で歩き出した。

歩きすすむたびに、進行方向に小石を投げていく。自分の体がたてる音しかない夜道に、耳を澄まして場を探る。聞き漏らすまいとするのは、自分へ降りかかる脅威の足音。もちろん自分以外の生

物、人物の気配だつて例外ではない。

さながら野生動物だつた。慣れてくると、歩幅もだんだん大股になり、エリカはずんずん進んだ。面はすっかり涙も乾き、形だけ開いている瞳は爛々（らんらん）と輝いている。

エリカは凶太かつた。そして少しだけ賢かつた。いや、賢いというよりは、勘が良くて運が強い子だつた。

時間の感覚なんて、不覚にも泣きべそをかいたところからなくなっている。小石の音が変わつたのは、百は投げたかという時だつた。

石が落ちる音がしない。

立ち止まつて、もう一度投げた。やはり、しない。

草地に出たか、それとも、そこに地面が無いのか――？

背筋が寒くなつたエリカは、一気に三つ握って前方にブン投げた。それはもう、力いっぱい。

「あいたあつ！」

次に聞こえてきたのは知らない男の声で、さらにエリカは今まで
の経験から『ここに人はいない』と思つていて、加えて――
エリカという少女の気性がまずかつた。

小石と侮（あなご）るとケガをする。いや、この場合は本当にケガをした。

この少女の手に握られていたのは立派な武器だ。

次の瞬間に、エリカはあらかぎりの力で、闇の中の未知の敵へと攻撃し——悲鳴を背にして脱兎のごとく逃げ出した。

それはとても、衝動的で悪意と敵意しかない犯行だった。

魔法使いの国 宵の果て（前書き）

【最果ての物語】

著者未定

かつてはこの世の栄華^{えいが}を極め、数々の文化と技術があつた世界。
搾取^{さくしゅ}の果てに太陽を枯れさせ、未だ新しい命は芽生えず。
この世界が再び新しい物語を築くのは、さらに数億万年後のことである。

魔法使いの国 宵の果て

ちっちゃな女の子の投げた石は、どうやら男に見事ヒットし、決してトロくさくはない立派な男性である彼に、衝撃と手傷を負わせた。

詳しく状況を説明するなれば、脆い石ころはぶつかつたとたんにパッキリ二つに割れ、その断面で男の額もパッキリ裂かれたというわけである。

少し切つた程度でも、血管の多いのが頭という場所です。それはエリカにとって幸か不幸か、これからの展開を思うと断言できかねるが、しかしまあ、男にとっては不幸でしかない。

噴き出た体液に男は盛大にひるみ、エリカはその間にスタコラサッサと闇にまぎれて逃げたのだつた。

「ひゃあああ」

しかしあちらも、九歳女兒に負けはしなかつた。悲鳴を上げながらも、すぐに後を追ってくる。ここでエリカは、悲鳴に少しの違和感を感じたが、それを考える間も余裕もなかつた。

逃げる女の子（美少女）、追う男（血みどろ）。

——さて、これが明るい昼間の交差点だったら、だれがこの少女の方が加害者と思うだろうか？

「きゃあ！」

「つ……捕まえたっ、ぞ！」

そして男は見事、少女を腕に収めたのだつた。

「いってえ…このガキ、とんでもねえな」

「大丈夫ですか、ミゲルさん」

「…大丈夫なもんかよ、イテテ」

ざり、ざり、ざり……。

もう一つ、近づいてくる足音と男の声。…あの悲鳴の男である。

「おいお前、よく裸眼でこん中見えるな……俺は暗視スコープねえと無理だわ。さっき石をぶつけられた時に飛んでつまった」

「俺の特技、これしかないんですよ。どこでも見えるっていうね。」

このへんは何にもないんで、普通に歩いて大丈夫ですよ。スコープは俺が後で回収します」

（二人いたんだ！）

エリカは身を固くする。

（『見える』って言った！もしかしてぜんぶ見えてる？暗くても全部見える？そんなのどうやって逃げればいいのか！）

「あ、君も大丈夫かい？おじさんたちはね、エリカちゃんを助けに来たんだよ」

エリカを捕まえている男がいった。

なぜ自分の名前を知っているのか。彼女の顔が恐怖に歪む。

この光のない中でも『見えている』男は、彼女の表情を見て首をかしげた。普通ここは、安堵するところではないのか。

首をかしげつつ、男は続ける。

「大丈夫だよ、おじさんは暗くても見える『目』があるからね。エリカちゃんのこととはちゃんと見えてるよ」

（やっぱり！）

さらにエリカの顔が恐怖に歪む。男は首をかしげた。

(……あれ？)

エリカにしてみれば、文字通り一寸先も闇、その先も闇、さらにその先だって闇である。自分の存在すら危うい闇だ。

そこに現れた、正式名称・動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獸亜綱正獸下綱靈長目真猿亜目狹鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種。しかもオス。分からない視界に鋭くなった感覚は、男の体臭も、走って荒んだ呼吸もよく分かった。

エリカは保護者に口を酸っぱくして言われている。『変な人には気をつけなさい』。

微かな血の匂いと汗の臭気、ゼエゼエハアハア荒い息交じりの『変な人』が、自分の肩をつかんでこう言っている。

「えりかちゃんのことはちゃんとみえてるよ」？

お先真っ暗、人生も閉ざされたと思ってても仕方ない。なにせ九歳である。

エリカは戦慄した。

(——逃げられないんだ)

そして、次の瞬間――産声よりも声高に泣き叫び、男たちの鼓膜に多大なダメージを負わせたのだった。

魔法使いの国 主役の脇で？

「まことに申し訳ない」

アイリーン
母親の真摯な謝罪に、男は目の上の傷に布をことさら押し付け、むつりと無言を通した。

隣のもう一人の男が肩をすくめ、大きな体をテーブルの前で小さくしている。相棒の態度を恥じているようで、同時に『銀蛇』のこの粗末なりビング兼キッチンに通されて、恐縮しているようだった。エリカの母、アイリーンは、スツと通った鼻筋に黒目勝ちの一重瞼、薄い唇、手足の長い体系に華奢ながら筋肉質の長身という、この界隈の娘たちから熱視線を受ける女性である。彼女たちには質素な服や、無造作にまとめられた後ろ髪すら魅力的に映るらしい。

男よりも豪胆との噂、美女というには敵つく、美人というよりは美形と称したい。中性的な女だった。

迫力ある女店主に男は、片方が口をへの字に曲げ、片方がそれを苦笑するという具合。

実際、このいじけた男——ミゲル・アモはたいそう小柄な黒人で、それを気にしている彼は、自分より頭二つ分長身のアイリーンや、大柄な白人の相棒——ダイモン・ケイリスクに囲まれ、実際のところこの場の誰よりも、居心地の悪い気分を噛みしめていたのだ。

「……お茶を」

アイリーンがそういつて席を立つと、ミゲルはわずかに椅子の上で身動きした。
みじろ

前述のとおり、商店街一番の大道（の、はず）『銀蛇』は、そうは見えないボロ店舗である。店と工房に押しやられている居住区のリビング兼キッチンは、いざという時には客間も兼任している。

住人が子供と、明けても暮れても職人が二人しか居ないので、基本的にこの建造物は、店のカウンター周り以外は物があふれていて、客を招き入れる態をしていないのだ。

どんな高級レストランでも、ヤカンを紙の山から発掘され、水を入れる、というプロセスまでは見せないに違いない。

そういうところをアイリーン自身がまったく気にしていない風なもの、アットホームすぎて居心地が悪い。

ふと、コンロの前で、テーブルから背を向けたアイリーンが呟いた。

「ウチの娘はいささかお転婆でしてね。しかしながら、自分ではどうしようもないことはやらのですよ」

男たちが『保護』してきた少女は、どう見ても親が見ても、異様に異常な動揺のありさまだった。ミゲルとダイモンは、そろって視線を下げたが、アイリーンの声色には非難は含まれていなかった。しかしこれは、保護者側の主張である。

ヤカンを火にかけると、アイリーンは静かに席に戻り、マットがぐらつく椅子に慣れたように落ち着くと、男たちを見据えて言った。「エリカの目に、貴方たちが善人に映ったのならあの子は石なんて絶対に投げません。物は考えられる子だというのは、わが子ながら自負しておりますので」

「彼女を驚かせてしまったようで」

ミゲルがあわてて言った。

「それはいかように？」

思い出したのか、ミゲルの眉間にしわがよる。もともと面相がいほうではないので、彼の雰囲気は剣呑としたものになった。ダイモンが沈黙に言葉を被せてくる。

「…あ、いえ、こちらは安心させるつもりが、裏目に出た……といった感じで。必要以上に驚かせてしまいました。実をいうと、僕も男の子二人の子持ちなんですが、やはり難しいですね。女の子はまるつきり違うようで……」

フォローのつもりだったのだろうが、語調がどんどん真剣みを帯びてくる。

「本当に…申し訳ありません」

ついには頭を下げたダイモンに、ミゲルは『とんでもない』という顔で、ダイモンを睨み付けた。「この馬鹿野郎！なんで謝るんだ」「でも…」「こっちの非を認めることになるだろうが！最近はそのいう…漬け込む隙つてのを与えちまうと面倒なんだ……！」
以上、小声での主張である。

「……ウオヘン」

ミゲルが場をとりなすように咳払いした。

「尊父もお呼びいただけますか。娘さんのことで」

「我が家に父親はおりませんの。祖父でよろしければ」

「そ、そうですか…いえ、どうぞ、ご老公でもなんでも」

「エリカ…本人は同席したほうが？」

「いえ…むしろ……」

「わかりました」

ミゲルは、ここまでで一度もアイリーンの表情が動いていないことに気付いたが、彼女の紅茶色の瞳の奥で、明かりの加減か、くると赤い何かがひるがえったのを見た。

魔法使いの国 主役の脇で？（前書き）

『魔法使いの国』

著者不明

かつて魔女が降り立ち、この世界のどの地よりも繁栄したとされる国。『魔法』という技術が日常にも浸透している。

故に、正式名称が『魔法使いの国』である。

魔女の直系である魔法使いフェルヴィンが建国者とされる、勤勉と職人の国・フェルヴィン皇国からは、聖地との認識をされている。数年前フェルヴィンの双子皇子の片割れ、弟のハンス王子が婿入りし、正式にフェルヴィン皇国とは、姉妹国との同盟を交わす。

移民も多く迎えられているが、繁栄の陰には魔法が使えない移民と魔法使いである現地民との、深刻な差別問題がある。

魔法使いの国 主役の脇で？

先代『銀蛇』老は、流木の様な老人であつた。

腰はやや曲がつているが、動きはちゃきちゃきとしていて、現役具合を主張している。

杖垂したれた眉毛の陰から覗く、澄んだ空色の鋭い目つきにアイリィンとの共通点があつた。

「さて、まずは私どもの役職についてご説明しましょう」

慣れていないと丸わかりの、厳おそかな口調でミゲルが場を仕切るが、老は座席のぐらついた椅子の上で、ゆっくり頷いて見せた。

「我々は、『異世界管理局』を母体とした、『物語管理局』という組織の実働部隊、正式名称を実働異世界派遣部隊『夢人』ゆめひとの第三部隊に所属しております」

「いせか……なんだって？」老がふさふさとした眉を持ち上げる。

「異世界、派遣、実動員、です。名前の通り、『異世界』間の外交を『管理』する組織の、実際に異世界に出動することができるのが、我々というわけです。異世界間での密輸犯罪などを主に取り締まっている、役人……の様なものと、お考えください。

『異世界』の定義は、この世界ではメジャーだと聞いておりますが？」

「確かに。ここは魔法使いの国ですから、異なる世界というものは存じております。しかし、それはあくまで『知識として』。言うなれば伝説上のファンタジーです」

「……我々からしてみれば、この世界の方がよほどファンタジーファンタジーなのですね」

ドラゴンが重要絶滅危惧種の現地人がそう言ったことに、ミゲルは驚きを隠せない。

「つまりはまあ、そういうことなんですよ。文化が違う、言語が違う、人の営み、さらには人間が何から進化したのかというプロセス、『ニンゲン』という生き物の定義すら違うこともあり得る。そう…ファンタジー、想像上、空想が現実、それがまかり通る。まさに物語の世界です」

「物語の世界……」

「そう、ここも含めて」

銀蛇の祖父と孫娘は顔を見合わせた。

「だから我々の組織は、物語管理局というのです」

さて、ミゲルはここで、もう一つの事実をあえて言わなかったのだが、それは後々に語ることでしょう。

ここまでくると、曾祖父と母親は娘に関して何かしらの『予感』を感じ取る。

「我々は、今回エリカさんを『保護』いたしました。貴方方は、エリカさんの失踪にお気づきでしたか？」

「気づくも何も……」

老は明らかに困惑している。アイリーンが後を引き継いで言った。「エリカの『あれ』は、だいたい半年前から。それこそ、半月に一度……いいえ、最近ではあの子も私たちもすっかり慣れてしまっただけ、私が確認していないものも入れると五日に一度はいなくなるのです」

「い、五日に一度……！？」

「そ、そりやまた、驚異的な数字ですね」

男たちは、目玉をむき出しにする。

「なんでそんなことになるまでほつといたんだ！　ばつかじゃねえの」

椅子を蹴飛ばして吠えたミゲルの赤黒い顔を見返し、老は長々と溜息を吐いて首を振った。

「やれやれ……ここでは良くあることなんですよ、お役人。子供には特に、よくあるんだ……。歩いてすぐの子供が転ぶのとまるで同じ。魔力の暴発——といっても、普通なら窓が割れる、大風が吹く、火が知れずに燃え上がる、それくらいなんだがね、あの子はこの年まで魔法が使えなかった。『この世界ではよくあること』なんだ。人でなし、親で無しと罵らんでくださいな。いやあ、麻疹はしかのようなものだとばかり……」

背中を丸めた老が、悲しげにぼやく。

「それに……あの子の父親もそうだった」

また長々と深い息を吐くと、老人は皮肉げに言った。

「……ここに来てから、あの子が産まれたあの日に消えるまで。突然いなくなつては帰ってくる。それをあいつは繰り返した。そんな男を家に迎え入れたのが悪かったのか、いやはや……良く似ているからなあ、エリカは。ハハハ……」

うつむき、テーブルの木目を見つめながら、老人は空笑いをする。しかし顔を上げた時の老の瞳は、やはり綺麗に澄んでいたため、ミゲルはわずかに椅子の上でのけ反った。

老は問う。

Q・「…おう、若いの。この物わかりの悪い老人に、良くわかるように答えておくれ。あの子は今までどこにいた？どこに行っていた？」

（あの子の父親もそうだった）

A・「…異世界、ってやつさ」

魔法使いの国 主役の脇で？（後書き）

ついた↓
http://twitter.com/#!/r
ikuitt

魔法使いの国 主役の脇で？

「この世界にや、因果な境遇の人間つてのがいるもんだ。それはわかるだろう？ 見たところ、アンタも長いこと生きてんだからさ」
肩をすくめてミゲルは言った。

「それがどうやら、アンタとこの娘さんは奇遇にも俺達とおんなじ境遇の様だ。…なあ爺さん、そこのお母さんも。俺たちは、娘さんを今後も『保護』したいんだ」

「…保護？」

「ぶっちゃけちまうと、娘さんの身柄を俺らに預けてほしいのさ」
アイリーンの眉が、きゅっと寄った。

「それは…期限はいつまで？」

アイリーンの声色は、厳しい表情と反して、弱弱しいものだった。
固唾をのんで、アイリーンは続きを待つ。

「そりゃあ一生さ。…酷な選択かもしれねえが、俺に言わせると、『イエス』か『ハイ』しか選べない問題さ。おっと、これは脅しやら不正取引やら詐欺やらじゃないぜ？ 疑うのは結構だが、俺は事実しか言わねえよ。ウソやペテンや言葉遊びは嫌いだぜ、特にこういう状況ではな。」

物語管理局は、娘さんみたいなのを保護して、もちろん生活の援助もする。これから先、娘さんの『病気』は治る見込みは無い。それどころか、もっと酷くなるかもな。そのうち帰れなくなるかもしれないねえ。『異世界』で酷い目にあつて、死体すら帰ってこないかもしれねえ。それを誰より俺達は知ってるが、証明する術は無い。

アンタたちはいくらでも俺達を疑えばいい。いくらでも娘さんの

ことを考えればいい。でも、手遅れになったらその時は俺たちは何もできないんだってことを忘れんなよ」

「……わかった。考えるようにしよう」

そう一言、ミゲルを見据えるアイリーンは蒼白だったが、表情は険しく視線は蛇の様に鋭かった。

ミゲルはじつと視線に耐えていたが、逃げようものなら地獄の果てまで追ってきそうである。……いや、どこから『逃げる』などという発想が浮かんだのかすら――。

ようするに怖いのだ。恐ろしいのだ。淡々とした女だと思ったのだが、これが彼女の本性か。杖職人とは杖を作るたびに死線を越えるような、そんなに殺伐とした職業なのだろうかと頭が明後日の方向に問いかけるくらい。

先ほどまで朗々と演説していたはずのミゲルは、気まづげに視線を下げた。詰問……いや、尋問されている気分である。

良く考える。ミゲルは打開策を提案しただけだ。けれど『疑え』と促したのもミゲルだ。……自業自得だろうか？

老人は目を細めて孫娘を、委縮したミゲルらを一瞥すると、励ますように彼女の肩を叩いた。

「それで、ひ孫を保護して、どうするんだい？」

「そ、そりゃ、悪いようにはしない」

ミゲルは深く息を吐いた。

「教育もさせる、ある程度まで育ったら、仕事も斡旋することだってできる。一人で生活できるようになるまできちんと援助する」

「無償ってわけにゃあいかないだろう？それともそこは、ボランティア団体なのか？」

「……それはノーだ。彼女の行く道は大きく二つ。一つ、こっちが選んだ里親の元で暮らすか。二つ、訓練を受けて、『俺達みたいないな』異世界への派遣員になるか。管理局は万年人手不足だからな。収入は十分、食いつぱぐれはしないだろうが、キャリアも積み使った時間はなかなか少なくなるってところか」

ミゲルは言っているうちに調子が出てきたようだ。あえて活気をたっぷりの口調を繕い、アイリーンに笑いかけた。…引きつっていたが。

「それなりに面倒も多いが、楽しい職場だ。それは俺とコイツが保証するぜ。男ばかりってわけでもない。女もいるし、こいつなんか」

ミゲルは親指で相棒を指した。

「——職場結婚だ。ガキも二人」

「……………」

アイリーンはミゲルとダイヤモンドを交互に見詰め、最後に祖父を見た。老は力強く頷く。

「……………」
「……エリカにきいてくれ。あの子は、もうちゃんとわかる子だから」

魔法使いの国 主役の脇で？（後書き）

ミゲルのオッサンターン終了のお知らせ。

…ミゲルさんは作者のお気に入りです。

魔法使いの国 善人

エリカはなんとなくわかっていた。今大人たちは、『自分のことを話しているのだろうなと。』

彼女に宛がわれた子供部屋：屋根裏部屋のベッドの上、膝を伸ばしてオレンジの照明が照らさない隅っこの闇を見つめる。

エリカはまだ、『何もしない』ということを楽しめるほど、疲れでもないかったけれど：なんとなく今は何も考えず、待っていることが一番いいような気がしていた。

エリカはたぶん、頭の隅で分かっていた。いや、理解はしていなかった。肌で感じていたというのが正しい。だってエリカはまだ、『親元を離れる』なんてことは、とんでもないことだという年なのだ。

だから、（なんとなく予感はあるけれど）：悪いことは考えないようにする。

この心理状態を何と云うか？ 貴方も言葉はよく知っているはずである。夏休み終盤などによくある光景だ。

エリカ・クロックフォード9歳、これが生まれて初めての現実逃避。

……ぎしっ　ぎしっ

ふと、耳に届いたのは、屋根裏までの階段を上がってくる音だった。子供部屋と大人の部屋が離れてある場合、子供はたいがい保護者の『足音』を記憶しているものだ。（母なら大股で一段飛ばしに大きく、じい様なら踏みしめるように、ちなみにベンなら小さな歩

幅でせかせかと)

この大人の足音は誰か？という自問自答には、軽く答えが出た。
あの大人達のどちらかだ。

エリカは一気に不機嫌になった。恐らく足音の主がミゲル・アモならば、さらに不機嫌になったはずである。

「やあ」

寝癖の様に跳ねた茶色の髪、凡庸な顔立ちにドンと乗った真つ赤なフレームの派手すぎるメガネ、人の好さげな笑顔。

屋根裏の入り口から頭だけを出して、大きな眼鏡の奥で苦笑いした男は、どこことなく大好きなフランクおじさんに似ていた気がした。

「さらし首」

「…え？」

「おじさんは知らない？生首のことよ。処刑されて、大衆の見世物にされてる大罪人の生首のこと」

ふんつとエリカは鼻を鳴らした。「あと、そんな罪人のおぼけの名前なの」

「物知りなんだねえ」

本気でダイモンがそう目を丸くするものだから、エリカはまた鼻を鳴らす。

分かっているのだろうかこの男。階下から顔だけ出している様子がその『さらし首みたい』と、エリカは言っただつたのだけだ。

「上がってもいいかい？」

ダイモンが訊いてきたので、エリカは小さく頷いた。

「ベットじゃなくて、床でもいいのなら」

エリカが思うに、たぶんこの男は『いい人』だった。メガネは派手だが、その中身はいたって地味だ。濃いブドウ色の瞳が、より無

邪気さを演出している。ただ小さい子供の様で、何を考えているのかは分かりづらいけれど。

エリカはベットに、ダイモンは床に座って、まず好きなものを言い合った。クッキーやら飴玉の味とか、好きな本や遊び、あと、『お母さん』のことだとか。

ダイモンはずいぶんと背が高い。エリカがベットに腰かけると、ちょうどダイモンが少しばかりエリカを見上げる形になった。

「俺はね、奥さんと子供…男の子二人いるんだ」

「男の子だけ？」

「そう。けれど、女の子もいいねえ。女の子もほしかったかもしれないなあ」

「妹、作ってあげたらいいじゃない。お父さんと、お母さん。二人ともいるんだから」

「うーん、ほしいけれどねえ、うちのお母さんは、もう子供作れない体なんだ。だから、一人くらいは女の子でも良かったなあ」

あくまで男は機嫌のいい子供の様で……エリカはそっと、嘆息した。わたし、まだ子供だもの。そんな難しいのはわかんないわ。

「エリカちゃん、今度は俺たちの仕事について教えようかな。ご質問は？」

「何をしている商売なの？」

「…うーん、まず、商売じゃないかな。この仕事は」

ダイモンは即答した。しかしエリカは商店街の娘である。

「どちらかといえば、『商売している人を捕まえる』っていうか…」

「わかった、悪いものを売ってる人を捕まえるのね。安いものを高く売ったり、盗んだものとか、売っちゃいけないものを売ってたり…えーと」

小さな指を折り数えて、エリカは即答した。「まだあったはず」とまだうんうん唸っているが、正解だった。

「あたりー…」

「待って、まだ正解にしないで。えっと、密輸品、人身売買、麻薬

売買、盗品…えーと、いろいろ…不当な値上げのこと…じい様はなんて言ってたっけ…」

これすべて、9歳児の頭の中からこぼれ出た言葉だ。

エリカは生まれも育ちも教育方針も、商店街の娘である。

魔法使いの国　よい人

ダイモンは、数度にわたって通ってきた。

ベンはあるから商店街に顔を出さなくなっていたので、暇を持て余していたエリカはそのたびに子供部屋で彼の話を聞いた。

「わかったわ。つまりおじさん、お役人なのね」

「そうだね。あとプラス、探偵って感じかな」

ダイモンは下手すぎるウイंकをした。エリカは分かりやすく渋顔になったので、ダイモンは肩を落とした。子供ってものは、いやはや、格好悪い人間に厳しい。

「この仕事はね、スカウト制度なんだ。もとは普通の人で、スカウトされてこの仕事に就く。さっきのもう一人のおじさんも、もともとはジャーナリスト……ただのカメラマンなんだ」

「あの怖い顔で小さい人ね」

「そうそう、ミゲルさんって人。戦争とかの写真を撮っていたりしてたんだって」

「……だからあんな怖い顔なんだわ。あなたは何をしていた人？」

「俺？　俺は学生だったよ。普通のね。学校の先生になるための学校に行ってた。あのままならきつと、君ぐらいの子供に教えてたと思うんだけどなあ。まあ、そのおかげで奥さんに会えたし……」

ダイモンは目を細めて、幸せそうに笑った。

エリカは質問したことを後悔した。ついでに思い出した。彼のその話、態度に、エリカのテンションは下がっていく。

「……良く考えてみれば、この話は息子にもしたことなかったな。まさか君みたいな女の子とこういうお喋りをするなんて……なかなかいいもんだね、帰ったら子供たちにもしてやろうかな」

エリカは動揺する。彼は少女が沈んでいくことに気付かない。エ

リ力は見慣れているはずの室内を、戸惑う様にせわしく視線を彷徨わせ、

「そうしたほうがいいわ。だって、自分の父親の話だもの、聴いて損は無いのよきつと……」

—— 何もない壁の方に、視線を落ち着かせた。これで彼に顔は陰になって見えない。

「他の人から聞く親の話なんて、嫌なものよ。自分から話してくれ
たほうがずっといいわ」

「そんなもんかあ」

「……きつとそうよ。当たり前でしょ？」

ダイモンの顔をうかがう様に一瞥し、エリ力は今度こそうつむいて右手の甲でごしごしと顔を擦った。

「同じ子供なんだから、私は専門家よ。なんでも聞いてちょうだい」

「いいや、もうこの話は終わりにしようか。話さなきゃいけないことがあったのを忘れてたんだ」

「あら、そう……」

エリ力はあらかじめ肩を落とす。それは『がっかりした』とも見えたし、『話が終わって安堵した』とも見えた。

彼女自身も、自分がなぜそうしたのか分からなかった。恐らくは、半々の気持ちだったのだ。彼と家族の話をしたかったけれど、自分が傷つく可能性も恐れた。現に今、彼女は少なからず傷ついている。

杖職人の商売では、悪人にも善人にも杖を売る。いや正確には、親が子供に買い与えるものだから、その子供が『悪』にしろ『善』にしろ、どんな可能性の芽があっても杖を売らなければな

らない。

過去に『銀蛇』の杖を持った人間には殺人者もいたが、慈善活動で勲章をもらった偉人も『銀蛇』の杖を使っていた。金持ちもいるし、没落した貧乏人もいる。この国の王様だって『銀蛇』の杖を使っている。中級家庭以上の家庭なら、魔法用杖のランクが最上の『銀蛇』を買うのである。

これはすごいことだ。

老は言う。「売る相手を選んではならない。売りたい相手にも、お金を出されれば売らなければならない。これは商人のルールだ。でもね、エリカ。『売りたい相手』というのが出てくる。そういう時は、タダでもいい、絶対に買わせなさい。損はしない」

「エリカ、幸せになってほしい人というのを、お前は必ず見つけるよ。善人だろうが、まれに悪人かもしれない。恋人かもしれない、新聞の質問コーナーの人かもしれないし、家族の誰かかもしれない。『幸せにならなきゃいけない』と思う人だ」

ダイモンは、幸せを体現したような男だった。

ダイモン・ケイリスクの話、それだけじゃなく声の調子や、大人げなくすこし間延びした語尾の癖などは——エリカにとって、おとぎ話よりは現実的で、けれどまるつきり現実的とは言えない、『手に入らないもの』だった。だからエリカは思った。

「ねえ、貴方の子供たちは幸せよ、絶対そうだわ。決まってる」
「え？あ、ああ。ありがとう」

エリカは、彼の様な父親なら欲しかった。だからきつと、彼の子供は幸せだ。

『幸せにならなきゃいけない』。じゃなきゃ、エリカは泣いてしまふ。

番外作：違法異世界旅行者『東 シオン』（前書き）

アイリーン「そっいえばちっさいオッサンおりませんけど、どうなりましたん？」

ダイモン「ミゲルさん出世しなはったんですわぁ」

ってことで、ミゲルさんのターン！

番外作：違法異世界旅行者『東 シオン』

ミゲルには、トラウマと言える記憶が三つある。

一つは遠い昔に徴兵された土地で見た光景で、それは後々ジャーナリストとなるミゲルの理由の一つになった。

二つ目は20の初冬、迷い込んだ異世界で初めて未知の怪物を見た時。

三つ目は物語管理局にスカウトされた後の28の時。追い求めた戦乱の中で見た、小さな鬼神の猛攻。

舞い上がる砂が視界を黄色く霞をかけていた。ミゲルは腹ばいになって茂みの中に息をひそめ、フレーム越しの先にある光景をフィルムに収めていく。

物語管理局の研修は、平均して3年ほどで終わる。その間に戦闘訓練・基本知識・実習などを経て、『夢人』という実行職員の地位に立つのだ。平均の3年を少し過ぎ、4年で研修を終えた二年目。ミゲル自身、二十も後半で、本業だった記者としても夢人としてもまだまだ新人の心持である。

ミゲルがこの異境で、異端民族と原住民の陣取り合戦にカメラを向けているのには理由があった。

一五まである夢人部隊の中で、のミゲルが所属する第二部隊。諜報を得意とするそこで、新人が最初にするのは、違法異世界旅行者、通称『イレギュラー異端者』相手の情報ファイルづくりだ。

膨大な資料に特攻するのは、ミゲルの性に合わない。現地に飛んで生写真を手に入れなければ、記者はミゲルではないのだ――

」。

今思えば、頭の悪い若者のプライドによるものである。ようするに、ほかの新人と混じってセコセコ資料作りをするのが我慢ならなかった。それだけだ。

薄茶色の髪をした異端民族とミルク色の髪をした原住民の、血で血を洗う争い。

衣食住のうちの住を求めて衣も食も削っているというのに、この土地はミゲルの目にはそれほど争うほどに魅力的な土地とは思えなかった。もともと豊かとは言い難い民族同士のことだ。戦は儲かると言うが、それにしたって程がある。所詮は身内の争いかと部外者^{ミゲル}は勝手に呆れ果てた。

(…ん?)

ミゲルは鼻頭にしわを寄せ、カメラを置いて双眼鏡を構えた。異端民族の薄茶色でも、原住民のミルク色でもない。原住民の方の鎧を着た黒い頭が見えた。

「みつけたっ!」

ミゲルは茂みの奥で小さく跳ねた。

^{イレギュラー}

異端者の中でも相当に若い異端児。10と少しの年齢にして、30を超える世界を渡り歩いた旅人。

ミゲルの目的は、彼の写真を撮ることだった。異端者達というのは見つけるのが難しい上に、いざ見つけても特徴というものは目撃者の口伝や、報告書に書かれる僅かな単語の羅列でしか知るすべはない。『青のシャツ・青い目・金髪』なんて資料で、どうやって特定しろというのだ。現状を知った時のミゲルの頭に浮かんだのは、『写真を撮る』という発想だった。

(シロウトが使い慣れないカメラをとっさに構えるなんてことはできない。でも、俺なら……戦場でカメラを抱いて眠っていた俺なら、きっとそれが出来る!)

少年は身を低くして地を滑空するように駆^{はし}る。額に巻いた布が光線の様にひるがえり、身を捻れば空に曲線を描く。

軽い身なりで驚くほど大きな敵を弾き飛ばし、戦闘分野には秀でていないミゲルの目には、あまりに容易く軽快な動作に『簡単そうだ』と、錯覚を覚えるほどだった。

（得物は長太刀、体格は小柄で華奢だが……体力や力は一並み以上にあるんだろうな。あの武器は彼の体格じゃ、本の強化無しに振り回すのは辛いはずだ。しかし生身でアレとは……）

「……イリ、視力の強化頼む」
「わかった」

ほぼ強引に引っ張ってきたはずのパートナーも、ぐんぐん上昇するミゲルの情熱に素直に協力した。視界が透明感を増し、ぐっと遠くまで見渡せるようになる。カメラを構えた。

その時だった。

（まずい！こっちを見た！）

少年兵の目が、茂みの奥のミゲルを捕らえる。

（いや、見えてるのか！？まさか！）

でも目が合ったのだ。杞憂かと思った一瞬も、彼がまっすぐこちらへ向かってくることで壊される。（まさか、まさか、まさか！）

邪魔な敵は薙ぎ払う。視線はこちらを外さない。足の歩みは異様に早く、彼はミゲルまで一直線だった。

黒髪に黒目だと思っていた瞳の色が濃い紺色だという事にミゲルが気付いたとき、彼はなりふり構わず通信機器に叫んだ。

ミゲルが最後に見たのは、太刀の先にある鬼神の瞳――

「ちよう、たいちよう、起きてください隊長」

「ううん」

唸り声を上げて第三部隊隊長——ミゲル・アモはテーブルから顔を上げた。

部隊の研究室だ……。どうやら、ここ数日の徹夜でついに意識が落ちたらしい。冷たく固い研究室のテーブルを枕に睡眠はとるものではないことを実感した。

（ひどい夢を見た…）

坊主頭を掻き、まふた 瞼を揉む。「お疲れですね」と、側らの部下が言
った。

「何か悪夢でも見ましたか？」

「ああ……まあな」

「なんだ、じゃあ器具つけて寝てもらえばよかったですね」

「…脳電図は取らせねえぞ」

「そこをなんとか、次はお願いしますよ。夢とかの———そういう研究してるやつがいるんです」

「**他を当たれ**」

「そんなあ」

この会話からわかる通り、物語管理局 第三部隊は、アイテム研究を主に行っている機関である。元第三部隊員のミゲル・アモは、そ

ここに隊長として就任したばかりだった。

といっても、彼自身には研究員としての技術も、知識も、情熱もない。研究に没頭し、時に暴走する第三部隊の職員達のお守りをさせようという心づもりなのだろう。

「むしろ知識が無くて助かりますよ。あれこれ面倒くさくやり方に口出しされる心配は無いですからね」

脇に立つこの副隊長とやらも、他の隊員を代表して異論はないらしい。

（嫌なことを思い出ししまった）

一隊員としての『最後の仕事』は、ある意味ではミゲルにとっては因縁ともいえるものだったのかもしれない。

まさかあの、東シオンの娘のスカウトなんて。

ミゲルが知っているのは、まだ思春期も半分ほどしか経験していない幼い少年の姿だ。幼く、華奢で少女めいていて、小奇麗な印象の少年。けれど手を出せば、凶悪な牙で喰いつかれる。

エリカは周囲が異口同音に口にするように、シオンの面影を色濃く受け継いでいた。むしろミゲルの中のシオンは、あの小さな鬼神のままである。妻子持ちの青年シオンなんて想像できない。

エリカはそれをずっと小さくした印象で、彼女の一挙一動は心臓に悪いにも程があった。

隊長就任の際に、この『最後の仕事』はダイヤモンド・ケイリスクに押し付けてきた形になるが、それでよかったと思っている。9歳の女の子に四十手前の男がビビるのも情けないけれど、こればかりは仕方ない。ストレスというものは彼女と顔を合わせるだけで、どう

しよつもなく蓄積されるのだ。

ああ、よかった。

本当に心から情けない話だが、解放されたミゲルは、また心から
そう思う。

番外作：違法異世界旅行者『東 シオン』（後書き）

ミゲルさんは作者のお気に入りです。

番外作：雨好きの男

その日は、夕方から秋にしては冷たい雨が降っていた。

フランク・ライトは、屋敷の廊下を足早に進んでいた。人が好きそうだと称される面立ちはいつになく厳めしく、後ろを追いかける妻、ミイもいつになく歩幅を大きく焦ったように夫を追いかけている。

貴族の三男坊、分家として小さな屋敷と妻を与えられ、都外れに住む若者は、今朝方親友のうれしい知らせを聞いたばかりだった。扉を開けると、貴族というには質素な広いだけのリビング。暖炉の前に男は立っていた。

「シオン！ どうしたんだ、こんな夜遅くに。生まれた知らせか？」

「」

「フランク…いや、まだだ」

黒髪から滴を垂らして、男は苦く笑って首を振る。彼は妻が今朝方に産気づいたばかりのはずだ。わざわざこんな時に来るなんて――

――ましてや、初めての子は難しいと聞くのに。

苦みの取れないシオンの表情にフランクは眉根を寄せ、その肩を軽く叩いた。

「本当にどうしたんだ。何かあったのか？ まさかアイリーンに……」

「……」

「いいや、アイリさんも子供も大丈夫。安産だと」

「なら……」

ミイがシオンにタオルを差し出す。

「ありがとう」シオンが受け取ると、彼女は気を利かせたのか部屋から退出した。

「酷く濡れてる。拭いたほうがいい」

「いいよ、時間が無いんだ……どうせまた濡れる」

「うちの床が濡れるだろ」

「……ああ、それもそうか」

大人しくシオンは触れた頭に布を被った。中肉中背のシオンのつむじはフランクの目線より少し低い位置にある。

身分や屋敷の大きさに比べ、自身も生活も派手を苦手とするフランクにとって、同い年の親友は弟分のような存在だった。黒髪に勝気な紺の眼、どこぞの美姫の様な顔立ちをしていながら、虫も殺せない素朴な彼は、半年前に卒業したばかりの学生時代からの付き合いだ。

卒業と同時に年下の許嫁との結婚を控えていたフランクと違い、シオンはまるきりの恋愛結婚、それも巷で言う出来ちゃった婚というやつである。

シオンの年上の妻アイリーンは豪胆な性質の才女で、同じ学校の卒業生になる。

男前なアイリーンと、慎重派のシオン。いささか男女逆転している様にも見えたが仲のいい二人だった。そこに決定打を打ったのが、卒業間近のアイリーンの妊娠である。

ミイとも仲が良く、彼女の結婚して最初のおねだりは、アイリーンの共同の結婚式だった。

もしかしてそれがしたいがために、アイリーンと謀ったのではとすら思っている。「どうせいつかできるモノだから」と、アイリーンならやりかねない。幸いにもミイは妊娠はただけで、自分にも他人事ではないとフランクは戦々恐々としていた。

今日の昼に今シーズン使えるようにしたばかりの暖炉が、早くも

仕事をしてシオンのうなだれた姿を照らしている。顔色が悪かった。まさか父親のほうがマタニティブルーというやつなのだろうかとも思ったが、それは無いなと思い直す。アイリーンに引きずられてシオンは思い切りがいい。あれだけ馬鹿みたいに喜んでいてそれは無い。

むしろ、もっと――

「フランク、話がある」

「何でも言えよ。僕にできることなら」

「……アイリさんと子供を頼む」

「……どういふことなんだ？」

「俺は……子供が生まれる前に発たなきやいけなくなった」

うなだれてシオンはきつく目を閉じていた。青い顔に浮かんでいるのは脂汗ではないだろうか。

「どうした、何があった」シオンは首を振る。

「ごめん、何も言えないんだ。頼むよ、君にしか頼れない」

「アイリさん達を置いてどこで何をするっていうんだ」

「……彼女がいるからこそなんだ」

「お願いだ、ちゃんと話してくれ。僕は、まず君が心配だ。――

――君の秘密とやらと関係あるのか？」

シオンは学生時代、欠席の多い生徒だった。

トラブルは多かったが、どちらかと言えば真面目な彼の欠席理由は、『持病のため』とのことだった。

しかし学内から『消える』『戻ってくる』のプロセスは、近くで見ている彼にはどこかに行っていたように思えてならない。

シオンには何か、大きな隠し事があるのだ。ずっと口には出せなかった確信の言葉だった。

しばらくの沈黙の後、シオンはようやくと口を開く。

「……俺も、何から話したらいいのか……そもそも話してもいいのかもわからない。話す時間もないんだ」

「……ならこれだけ教えてくれ。いつ帰ってこられる？」

「わからない」

「分からないことばかりじゃないか——まさか、生きるか死ぬかも分からないとでも言うつもりか？」

「ああ」

「……」

あつさりと返したシオンに、フランクは目を剥いた。

「シオン……」

「俺は、アイリさんたちを死んでも守りに行くつもりだよ」

「そんなのは……頷くしかないじゃないか」

「ありがとう」

また苦笑いだ。フランクは一つも笑えなかった。

「あら？ シオンさんはいつお帰りになりましたの？」

「……ついさっきだよ」

「そう……暖炉はやっぱり少し暑いわね。落としましょうか」

「……ミイ、銀蛇に行く。準備してくれ」

「私ですか？」

「ああ」

「はい」

：魔法が使えない魔女への鎮魂（前書き）

「あたしの名前はアリスですけど、でも——」

「聞くからに間抜けな名前だ！」とハンプティ・ダンプティは、短気そうに口をはさみます。「それでどういう意味？」

「名前って、意味がなきゃいけないんですか？」アリスは疑わしそうにたずねます。

「いけないに決まってるだろうが」ハンプティ・ダンプティはちょっと笑いました。「わたしの名前はといえば、これはわたしの形を意味しておる——しかも、すてきでかつこい形であるな。あんたのみたいな名前では、ほとんどどんな形にだってなれそうじゃないか」

引用・鏡の国のアリス <http://www.genpaku.org/alice02/alice02j.html#ch6>

：魔法が使えない魔女への鎮魂

ダイモン・ケイリスクという男は、『理想的に鈍い男』だった。

ヒトはどうやらそんな鈍いところを心地いいとするか、不快とするか、の両極端のようで、とある理由で出世街道から外れている彼は、驚くほど顔が広く、驚くほど知人が多かった。

しかし『知人』と称したのは、彼には物理的に友人を作る障害が多かったこともあるし、その人柄が親しくなるには、どうも癖が強いからである。

気の付くいいやつではあるのだけれど……どうも、自分へ向けられる少しの好意も、たくさんのお意ですら、ニコニコ何もわからない赤ん坊そのまま笑っているのが常だった。

結果的に、親しくなりたいと好意を持った人物には的確に、『私のことなんてどうでもいいんだ』と思わせる。

局内での有名人、ダイモン・ケイリスク。

ミゲルは実をいうと、ダイモンとはそう親しくは無い。けれどもそれでも名前は知っている。

夢人総勢8000人、それ以外の外部職員が1万人。1万8000の人間が、彼の名前と不名誉な功績を知っている。

少なくとも、噂なんて不確かな情報は信じていなかった。けれどその『噂』から悪意を取り去れば、真実そのものなのだろうなとは思っている。

ダイモン・ケイリスクと書いて、『空気が読めない善人』。なんていったって、これほどに好意も悪意も集めやすいタチの人間がいるだろうか。

エリカはここ最近、そりやもう毎日暇だった。

もう二月もベンは商店街で顔を合わせていないし、彼女と遊んでくれる同世代の友達なんてこの界限にいるわけがない。

そもそもエリカの家『銀蛇』は職人職で、ベンの家はお貴族様だ。毎日の勉強の時間があるけれど、商店街の子供は店番だとか子守だとかそれなりに仕事があるものだった。みんな忙しいのだ。

したがって、午後にふらりとやってくるダイモン・ケイリスは貴重だったし、心待ちだった。

相変わらずの素朴な顔立ちに似合わない、真っ赤なフレームのこつ眼鏡をしている。

「今日はちよつと難しい話をしようか」

「難しい話？」

エリカが屋根裏の子供部屋にダイモンを引っ張り込むと、彼は腰を下ろしてまずそう言った。

「ああエリカちゃん、その本棚の『鏡の国のアリス』と『マザーグース』、見せてくれないか」

腰を下ろしかけたエリカにダイモンは言う。さつと彼女が立ち上がり手渡すと、ダイモンは二つの本の1ページを開いて見せた。

【Humpty Dumpty sat on a wall.
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses and all
the king's men
couldn't put Humpty together
again.】

【でも、たまごはどんどん大きくなるばかりで、どんどん人間じみ
てきました。あと数メートルのところまでくると、そのたまごには
目も鼻も口もついているのがわかります。そして間近にきてみると
それがまさに他ならぬハンプティ・ダンプティだというのがはつき
りわかりました。「ほかに考えられないわ！ 顔中にハンプティ・
ダンプティの名前が書いてあるくらいはつきりわかる」とアリスは
つぶやきました。

それはそれは巨大な顔だったもので、百回書いてもまだ余ったで
しょう。ハンプティ・ダンプティは高い壁のてっぺんに、トルコ人
みたいにあぐらをかいてすわっていました——それもすごく薄い壁
で、どうやってバランスをとっているのか、アリスは不思議でたま
りません——そして目はしっかりとあさつての方向に固定されてい
て、こっちのほうをまるで見ようともしないので、実はぬいぐるみ
なんだろうとアリスは思いました。

「それにしても、ほんとにたまごそっくりよねえ！」とアリスは声
に出していいながら、腕を広げてかれをキャッチしようとしていま
した。いまにも落ちてくるものと確信していたからです。

ハンプティ・ダンプティは、ながいこと何も言いませんでした。
そして、口を開いたときには、アリスのほうを見ないようにしてい
ます。「たまご呼ばわりされるとは、実に不愉快千万——実に！」

「たまごそつくりに見えるって申し上げたんです」アリスはていねいに説明しました。「それに、世の中にはすぐきれいなたまごもあるじゃないですか」とつけくわえて、なんとか自分のせりふをほめことばに仕立てようとしてみます。

「世の中には」とハンプティ・ダンプティは、さっきと同じく目をそらしています。「赤ん坊なみの常識もないようなやつらもいるんだからな！」

アリスは、なんと答えていいやらわかりませんでした。まるっきり会話らしくないわね、だってハンプティ・ダンプティは、あたしに向かつてはなにも言わないんだもの、とアリスは思いました。いや、さっきのせりふだって、見た目には近くの木に向かつてのせりふです——そこでアリスは立ったまま、静かに暗唱しました

「ハンプティ・ダンプティ壁の上
ハンプティ・ダンプティ大転落。

王さまの馬や兵隊総がかりでも

もとの場所には戻せぬハンプティ・ダンプティ」

「最後の行は、この詩にはちよつと長すぎるのよね」とアリスは、ほとんど声に出して言いそうになりました。ハンプティ・ダンプティに聞こえるかもしれないのを忘れていたのです。」

「これには両方ともパンプティダンプティが出てくるね」

「ええ、知ってるわ。私の部屋にあったものだし……」

「じゃあエリカちゃん、質問だ。この鏡の国のアリスはどんな話？」
「……」

エリカは期待に応えたい一心で、彼が求めている答えと思うものを口に出した。

「椅子に座っていると、暖炉の上の鏡がとろけて見えた。手をつけたらアリスは鏡の中に入れたので、鏡の世界をアリスは冒険するわ。結局、前と同じでそれは全部、暖炉のそばの椅子の上で見た夢だった。そんなお話でしょう？」

思いのほかしっかりとしすぎている説明に、ダイモンは少し動揺した。

「ああ、うん……そうだね」

「……駄目だった？」

「いや、良かったよ。じゃあ問題だ、エリカちゃん、これは『アリスの夢の話』だ。それならなんで、『ハンプティダンプティが出てきた』のかな？」

「それはアリスが卵の詩を知っていたから……？」

「正解！」

「やたっ！」エリカは拳を握った。「……でも、これが何の意味があるの？」

「しまった、説明の順番間違えたかも」

ダイモンは頭を抱える。

「まあいいや、これを頭の隅に置いて、次の話をしよう。エリカちゃん、しばらく君と話してわかったことだけど、君ならちゃんと理解できると思うんだ」

：魔法が使えない魔女への鎮魂（前書き）

【IRREGULAR（イレギュラー）】不規則な、変則的な、
不統一な、不揃い、例外措置、不連続など

：魔法が使えない魔女への鎮魂

物語管理局という組織を、普通の人間に理解できるように説明するのは難しい。しかしそれはまあ、第一話の【鳥頭の発見】、さらには先でミゲルが銀蛇店主達に語った内容がだいたいの説明なのだけれど、そのミゲルが、あえて省いた話がある。

それは管理局の思想だ。行動意義の一つ。それが僕が、一話の後に語った『この世界は物語である』。そういうものである。

異世界の概念に、パラレルワールドというものがある。

例えば朝パンを食べるか、ご飯を食べるか、という選択をしたとして、『パンを選んだ未来』と『ご飯を選んだ未来』と、世界の未来が枝状に分岐するという考え方である。

この些細な違いを繰り返し、大きく変わった未来。これをパラレルワールドという。

『あるかもしれない世界』。それがパラレルワールドだ。

しかし異世界の秩序を管理する異世界管理局、ひいてはその子飼である物語管理局の、『異世界』の定義は少し違う。

それが『世界は物語である。ひいては、それを考えた人間から生まれる』というものだ。

『言霊』^{コトダマ}というものがある。思いを込めて口に出した言葉には、力が宿るといふものだ。

『付喪神』^{ツクモガミ}というものがある。大事にされた道具は、99年たつと命が宿る。『付喪』^{ツクモ}は『九十九』^{つくも}と書くのである。

人の思いには力が、命さえ宿る。

ならば、人が作った物語なるもの、それがそのまま世界としてどこかの次元で確率しているのはおかしいことではないのかもしれない。

あるいは、どこかで出来た世界の出来事が、物語としてこの世に出てきているのかもしれない。これでは『卵が先か、鶏が先か』という話になってしまうが。

当然、物語には筋書きが存在する。

しかし管理局は実際に、さまざまな物語を所有・把握し、それを元に世界の異変を監視している。

そしてそんな管理局にとつての脅威というものが、『筋書きに無い存在』の『異端者』なる存在である。ミゲルの言いようでは、ただ単の『異世界に渡る能力者』だが、これでは少し言葉足らずなのだ。

世界の筋書きを変える者、だから『異端者』、『イレギュIRREGULAR』と呼ぶのである。

これらをダイモンは、噛み砕いて、至極丁寧に、砕き方にも頭をひねり出して、エリカに説明した。

エリカは眉間にしわを寄せ、考えながら最後まで黙って聴いていた。

「わたしにはちょっと難しいわ。おじさんには悪いけど、それで9歳の子供にする話じゃないと思うの。なんとなくにしかわか

らないわ」

「やっぱりそうか…まあ今は、なんとなくでもいいんだよ。なんとなくでも、わかっていたら」

「でも私、他ならわかったことがあるのよね」

エリカは、閑古鳥の鳴く店先で大人が吐くような、鼻に抜ける溜息を吐いた。

「そういう話をするってことは、私はやっぱり何かをしなけりやいけないんでしょう？たとえば、おじさんと同じところに行くかどうか？『今はなんとなくでも』って、そういうことなんですよ」

行儀よく揃えていた足を開き、エリカは尊大に胡坐をかいて頬杖をついた。瞳は半眼、口調は呆れている。

「子供にだって考える頭はあんのよ、ムズカシイ理屈はわかんないけど、人の気持ちならわかるわ。大人の都合ってやつよね？…ねえおじさん、どうせ私の父親も『そうだった』んでしょ？」

絶句する大人に、子供は唇を尖らせる。が、半分はやはり涙声だった。

「私、子供だけど、そこまでは子供じゃないの。大人の都合は、大人もどうにもならないから【大人の都合】なのよね。おじさんのお家にいかなきゃいけないのなら…おじさんの子にならなきゃいけないなら、私はそうするわ。子供はどうしようもないじゃない」

「ねえおじさん、私の父親もそこにいる？」

：魔法が使えない魔女への鎮魂（後書き）

「そこであんたに質問。あんた、いくつだっって言ったっけね？」

アリスはちよつと計算して言いました。「七つ半です」

「ブーッ！ おおまちがい」ハンプティ・ダンプティは勝ち誇ったように言います。「あんたそんなこと、一言も言ってやしないだろう！」

「『何歳なの？』っていう意味だろうと思ったんですけど」とアリスは説明しました。

「そういう意味のつもりなら、そういうふうに言ってるよ」とハンプティ・ダンプティ。

アリスはまた口論をはじめめる気はなかったので、なにも申しませんでした。

「七歳六ヶ月とはね！」ハンプティ・ダンプティは考え込むように繰り返します。「なんか落ち着かない年頃だわな。さて、もしこのわたしに相談してくれてたら、『七歳でやめとけ』と言っただろうが——もう手遅れだな」

「育ち方を人に相談したりなんかしません」アリスは頭にきて言いました。

「自尊心が許しませんってわけかい」と相手がつっこみます。

そう言われてアリスはなおさら頭にきました。「そうじゃなくて人が歳をとるのはどうしようもないでしょうって意味です」

「一人ならそうかもな。でも二人ならどうしようもある。しかるべき助けがあれば、七歳でやめとけたかもしれないのにねえ」

> i 3 6 0 8 1 — 1 5 7 <

空は灰色で重く、雪の降りそうな薄暗い日だった。

「くそ……っ！」

男は人柄に似合わない罵声を吐いた。

普段の彼なら、絶対に口にしない類の言葉だったが、こつも追い込まれると口について出たのかもしれない。

右目には真新しいガーゼが、肌に直接テープで貼りついている。

痛みから大きく体は傾ぎ、長く続く白い堀に左肩を支えさせ、ずりずりとしがみつく様に進んでいく。

虫の声が聞こえていた。

がああああ……ん

遠くから地響きと共に爆発音。ハッ、と男は隻眼を上げた。西の空にもうもうと黒い煙が上って雲にドロドロ溶けていく。

虫の音がやんだ。静寂。

「くそ………なんで……」男はうめく。小さく妻の名前を呟いた。

希望の光がまた一つ、男の胸でポツと潰える。

「目を…あいつに目を渡さないと……」

血の味をする唇をかみしめ、彼は立ち止りかけた右足を引いた。

また黙々と、左肩を支えに足を進める。

ガーゼを張り付けていない方、残った左目は爛々と鈍く、金色に光っていた。雲に陽が隠されていたその日、ことさらに良く目立つ。騒ぐ彼の心臓の音と同じだけ、瞳の中心にある瞳孔からは、金色の円が広がっては瞳の淵に消えていく。

カシャン、と、右手に握りしめていた彼のトレードマークだった赤い眼鏡が地面に落ちた。けれど彼はそれに気づかない。

もうそれは謔言^{くわげん}だった。

ダイモン・ケイリスは呟き、歩を進める。

トム・ライアンは、管理局の情報総括指揮部隊。第二部隊の長たる男である。

シルバークレイの髪を後ろになでつけ、鉤鼻にモノクルを引っかけた壮年の紳士は、身長が自分の胸ほどしか無い黒人の小男、ミゲ

ル・アモにデスクの向こう岸から一声かけた。

「第三部隊隊長就任、おめでとう」

「ケツ」

ミゲルは吐き捨てた。「これでアンタの下から出られると思うと、せいせいするぜ」

「おや、そんなに私を嫌ってくれるなよ。……まあ、幸いにも幸先良い始まりではなかったようだがね」

「まっ……たくだ！ 初の大仕事が身内の不祥事だったからな！ ったく、アテにならねえ指示ばかり出しやがって、右往左往するハメになったじゃねえか」

「いやあ、直前に君が第三部隊の隊長になってくれて、実に、まっこと、助かった！ 私の仕事の微々たる雑務が一割二分ほど減ったからね」

「……」

イメージ。【ヒット！ デッドボオオオオオオオ！】

「ははは」

「……………相変わらず、真実三割の大嘘が上手なこって」

「おや、私は君に対して嘘はついたことは無いさ。すべて裏表が純白の真実だ。教えてあげようミゲル坊、これは、【皮肉】というものだ」

「よおおく回る口ですねエ。舌がもつれて擦じれ切れるんじゃないのかジジイ」

「……………」

イメージ。【ヒット！ デッドボオオオオオオオ！】

「ケケケ」

「…このクソガキが」

「あン？なんだって？モーロク色ボケ糞ジジイ」

真顔でにらみ合う第二部隊長と第三部隊長。

一石を投じたのは、第二部隊長——トムの方だった。

「戯れはここまでにして、仕事の話しよう。君にはいくつか聞きたいことがある」

「あ？心当たりがねえな……なんだってんだ」

「ダイモン・ケイリスクが死んだ。しかも今回の『猟奇殺人』に関わりがあるかどうかも分からない不審死だ。直前の【最後の仕事】は君だったそうだな、話を聞きたい。」

本の国：アン・エイビー連続猟奇殺人事件 B 視点

がちゃん

エリカは、自分の身の半分ほどもあるトランクの上に乗ってギュウギュウに詰まった中身を押し込んだ。蓋を強引に閉めあげ、バンドで固定し、バンドの隙間に銀杖を挿す。

魔法使いの国で、魔法の杖を作る店に生まれながらにして魔法の使えない彼女は、勝手に異世界に移動するなどという『持病』により、物語管理局なる組織の保護を受けることと相成ったのである。

この南向きの屋根裏の子供部屋では、小さな天窓から白い月と、朝方の温い陽光が注いでいる。このベットも使うことはもう無いだろう。

エリカはトランクを抱えると、屋根裏から去って行った。

屋根裏から降りていくと、迎えはすでに到着していた。

深く帽子を被った小柄な体躯。子供のような姿だが、だぼついたジャケットを着ていて体格がよく分らない。帽子の端から、銀髪

がこぼれていた。

リビング兼ダイニング兼キッチンの一席を占領していた彼は、エリカが来たのを見るにすつくと立ち上がり、無言の礼をする。

よくよく見ると、着ている制服がダイモンらのものとは違つようだった。濃い芥子色をしている。

「案内担当者の、空子^{クウコ}・七島^{ナナシマ}と申します」

ギョツとするほど予想外に低く、落ち着いた声色だった。

「おじさん…あの、ダイモンさんは？」

「彼は今日は休暇を取っております。スカウトの時には、必ず私が同行いたしますので」

「そう……」

エリカは言葉少なに頷いた。

「ああ、エリカ準備できたか」

濡れた手を布巾で拭きながら、アイリーンが顔を出す。

銀蛇は、一人娘の出立の日でも、年中休業いたって普通に営業中である。

「待たせたようですまないね。エリカ、もう行けるのか？」

「ええ、いつでも」

「しかし…それにしても、まさか車で行くってんじゃないだろう？
どうやって異世界とやらに行くんだい」

「……………」

七島はこぶしを広げて手の平を見せた。ちよこんと乗っているのは、クルミ大のカプセルだ。ころりと転がったそれは、なんとも凝固した油のような、光を反射する黒色をしていた。

「もともと我々は異世界を渡るといふ能力は備わっておりますから、これは座標指定するものです」

エリカが聴いた。「座標指定って？」

「間違えて別の場所に行かないようにするのです。これを動かしますと、連動して持ち主の能力が発動されますので、発動装置としても活用できます」

「へえ、便利なものがあるもんだね」

「管理局はさまざまな世界の知識を集めることが容易です。第三部隊というそれを研究する部署もあり、日々、技術は進歩しています」
元の様に七島はカプセルを仕舞い込んだ。どうやら、袖に隠すポケットがあるらしい。「これも近年開発されたもので——従来ものは、局に連絡を取って連携しなければいけなかったのですが、それが無くなりました。座標がわかれば、どこからでも自由に移動が出来ます」

「へえ……」

知的好奇心旺盛な親子は、そろって前のめりに相槌を打つ。

「ねえ、じゃあ……」

「あとはあちらへ行けば嫌でも学びます」

ぴしゃりと七島は言い放った。

「……私は後でも聞けないのに」

「私も今聞きたいのに」

アイリーンとエリカは、そろって同じ顔で抗議する。

「そろそろ時間が推しています」

「お母さん、お祖父ちゃんは？」

エリカがさかさ聞くと、アイリーンが肩をすくめて薄く笑い、筵の後ろ頭を叩いた。

「いじけて工房から出てきやしないんだ。エリカ、お前の方から行ってやんな。」

老い先短いんだ、今生の別れになるかもしれん。いいだろう？」「七島は首を振った。

「10分だけですよ」

「因果ねえ……」

彼女が出ていくと、アイリーンはぼつりとつぶやいた。

「……彼女が辿り着いていた場所のことを、お聞きになりましたか」
「異世界ってやつだったんだらう？さあね、いつも違う場所だったって娘からは聞いてるよ」

「彼女が辿り着くのは、いつだって荒野でした。共通するのは文明が廃れた場所、人が捨てた土地、またはこれから人が辿り着く場所です。……物語の始まる前に行ける彼女は、とても貴重な存在になるでしょう。大きなことを成すかもしれない」

「物語の始まる場所？あんた、意外とロマンチックな言い方をするね」

「格好をつけるよりも、私は最も適した言葉を使用します」

「………大きなこと、ねえ」

アイリーンは乱雑に頭を搔くと、若者の様な仕草で後ろ髪をかき上げ、床に目を落とす。

「私もじい様も………きっとシオンだって、あの子に偉くなっ
てほしいなんて思っ
てないだろうよ。平々凡々でも幸せなりや——
——ああ、気にしないでくれよ。独り言だ」

【僕】は、そんな彼女の皮の厚い右手を取り、ポケットの中から先ほどの黒いカプセルを乗せた。

「……………どうということだ？」

「ただの保険です。『いざという時』、使ってください」

僕にしては珍しく、笑顔も作ってみせる。久々の笑顔でこれはどうだろうというような、底意地の悪い顔をしているだろうと思った。

「僕はもう一つありますから。」

「……………いざという時、つてのはどういう時だ？」

「貴方が使い時と思ったその時です」

「これはサービスか？」

「いいえ、打算による保険です。『僕ら』のこの先の保険」

「……………もらっておくよ。ちなみにこれは、有事の際には爆発したりはしないのかい？」

「しません」

僕は笑った。彼女も笑った。苦笑いだった。

「使い時が来ないことを祈るよ」

> i 3 7 5 0 4 — 1 5 7 <

本の国：アン・エイビー連続猟奇殺人事件 B 視点（後書き）

現れた謎の人物！姿を見せないダイモン・ケイリスク！彼女の母の手に渡された謎の装置！

着々と何かに巻き込まれているエリカ。

本の国：アン・エイビー連続猟奇殺人事件 A視点（前書き）

グロ注意。

本の国：アン・エイビー連続猟奇殺人事件 A 視点

「ね、お人形遊びしよっか」

アン・エイビーはそう言って、少年の鼻先で立てた人差し指をクルクル回した。少年にとっての『年上の友達』は、時々こういう、無意味な手遊びをするのが癖だった。

少年の大きすぎる董色の目が、焦点が合わないほど間近のそれをじっと見る。

「あたしねえ—— アンねえ、訓練して、戦えるようになって、がんばって、出世して、お給料増えて—— 昔に比べりゃソコソコ成り上がったのよお」

「す、すごいじゃない」少年はやっと、という様に言った。

「お姉ちゃん、すごい……」わざとらしく震えた声だった。

「んん、それがね、あんま良くないのー。あ、グチっちゃってる？ごめんね、でももう少し聞いて。お姉ちゃんちよつと疲れてんのあのねあのね、だっていいところだって言われて来たのにささ、アンのやりたいことはこれっぽっちも！やらせてくれないのよ。ありえなくない？こういうの、エート、コヨウ契約違反って言うのよね。詐欺だわあ—— なんていうか、そう…… 自由じゃないの。自由じゃないのよ！」

「……じゆう？」

それは今の少年にとって、一番縁遠い言葉だった。

「そう！お金が手に入ってもサ、ぜーたくできるようになっても、あたしが欲しいのはお金じゃないの！お金じゃ満たせないの！愛よ愛！簡単なことよ？アン安上がりだもの。あつたかいごはん、あつたかいベット、優しい人たち……でも、一番やりたいことは出来て

ない。やらせてもらえないの。不公平だわ！みんな持つてるものじゃない。そりゃあたしだって忙しいけど、そんなのサア、一分…うん、三秒あれば十分。アンは満たせるわ。満足できる。なのにやらせてもらえない。フラストレーション溜まるばっか」

「大変そうだね」

「そう！大変なの！ねっ、ねっ、あたし今までよく我慢したと思わなあい？」

アンは尖った装飾過多の爪を少年に突き付けた。

「思っつて言っつて！」

「お、思っつよ…ひいっちよつと離れてよう」

「んんん？…え、思っちやうの？キミちよつとおかしいよ」

「言えっつて言っつたんじゃないか…！」

「アンが？夢でも見たんじゃないの。……んでね、アンも自分がオカシイってわかってんのよ。自覚があるの！周りがそれに合わせるとは言わないモン。理解しろとも言わないしい——」

アンはまた指をクルクルやりだした。しかしすぐに飽きたのか、今度は少年の鼻を押して遊びだす。

「ぶぶー」

「痛い！爪が！爪が刺さってるうううううう！」

「あはっ変な顔」

凶器が少年の鼻さきの皮を、ついに突き破った。

ぶくつと出た血の滴を見て、アンは舌を伸ばして舐めとる。少年は耳まで赤くなった。「…かわいいかお」

舌舐めずりしたアン・エイビーは、今度は少年に見えないように後ろ手にクルクルやりだした。

「……………」

そういえば『お人形遊び』とやらはどうなったのだろうと少年は思う。彼女がこうも回りくどいのは実にめずらしいことだ。むしろ、こうも口上を立てるなんて、何かの前置きとしか思えない。

いつもなら、何も言わずにやらかして驚かせてくれるのが常なの

に。

嫌な予感しかない。

「……そうよ、そうそう！ お人形だったわね！そうそう！ タイクツな日常にスパイス！それでゲームを考えたのよう。ねえねえ、クエスチョン！ アンが一番面白いのってなーに？ 当てたらチューしたげる」

「え、えつと」「わかんない？わかんないわよね！ 普通のやつじやあ、アン面白くないモン。これでもちゃんと考えたのよう？ 子供の心を忘れないアンってステキ！ 自画自賛しちゃう。大人の遊びしましょ、チャック」

「お、大人の遊びって……」

少年、チャックはたじろいだ。

「スリルでシヨッキング！ R18、発禁指定のゲームよう？ね、ステキ。そいえばチャックはいくつだっけ？」

「は、八さ」「あらあらあらあ！ じゃ、大人の階段登るゝってやつう？ お友達に自慢できるよう？」

アンがチャックのにじり寄る。チャックは委縮して壁際に少し身を引いた。腹の前で握りしめていた両手をアンが取り、固く閉じた拳こぶしの指を一本一本開いて見せた。

「いいい？ ……これはお人形遊びなの。マリオネットって知ってる？」

「ぼく、お人形遊びなんて、女の子の遊びはしたくないよ……」

「うふ。マリオネット、知ってる？」

「……知らない」

アンがチャックの汗ばんだ手をぬぐう様に撫ぜる。「そう、知らないの。勉強不足ね」

彼女は唐突に手を伸ばしてチャックの頭をわし掴むなり、顔を近づける。チャックの喉がひゅつと鳴った。

「いい？あたしの目を見るの。そらしちゃダメ。体を楽にして。マリオネットってね、糸がぶらーんについてて、引っ張ると糸の先が

動くお人形なの。面白いんだから、楽しみ？」

「——ひ」

「楽しみ？」

「う、うん」首を動かせば頭がぶつかるような距離だ。

「でね、アンがそのお人形になるの。こつ、キミの指を動かして……」

アンはまた胸元で握りしめていた冷や汗だらけの手を取り、指を絡ませる。

「こつね…動かして……」

「ちよ、ちよつと離れて……」

「……ほおら、できた」

指が離れたので、チャックはすかさずアンから距離を取——

——ろうとした。アンの離れた指は、次の瞬間にはチャックの手首を軋むほどぎつちり掴んでいる。

「ほら、ちゃんと見て」

「な、なに？」

視線の先には自分の両手。指と同じだけの糸だ。息遣いにすら揺れるような、細い透明の糸だ。

「……なに、これ」

「ゲームの説明よ。よく聞いて。これはねえ、糸です！」

そりゃ見りゃわかる。

「……これが十本、端っこはアンの体の色んなところにぐるぐる巻きにしています。アンの右と左の両手首、フトモモ、おなかと胸と、首と、残った一本は右手の小指と、左手の薬指」

アンは彼の手首を離れた。チャックは首をかしげる。

「これはねえ、ゆつくり引くと、いつっ……ぱい伸びます。いつ、くらでも伸びます。好きなだけ伸びます。……けれど一気に引くと」

アンは右手を視線の高さに上げ、左手で右手小指の糸を軽くたわむほど掴んだ。

引く。

「——きゃああああああああああああああああ」

悲鳴を上げた少年の目の前に小指を突きつける、凶器の様な鋭い爪はもう無い。それどころか関節が一個しかない。目を覆おうとする彼の手はアンに掴まれ、身を寄せてきた彼女によってより目に入る羽目になった。アン・エイビーは矢次に言葉を放つ。

「ねえ見て、ちゃんとこれを見て。わかる？ わかった？ ねえ、こうなっちゃうの。こんなふうになるの」

「もうやめて！」

「やめるかよお！ ほら、見なさい。見て、あのね、あのね」

アンの左手は少年の目を、鼻を、口を、耳を、ふさぐことを許さない。悲鳴に重ねてアンは叫んだ。

「いーち！ この糸がキミにくつつきまあああす！ にーい！

キミのこの糸は取れませええええん！ さーん！ キミが、ちょおおつとでも急に動いたら、アンの大事なトコロが取れちゃいまあああああす！」

「やだあああああ」

「洗っても取れません！ はさみでも切れません！ みんなには見えません！ あはは、鼻水でてるう変な顔」

「そんなの、痛いじゃないか。死んじゃうじゃないか。面白くないよ！」

「そうだよ、血が出るよう？ とおつても痛いのに」

アンはこれ見よがしに傷口を揺らした。

チャックは顔をそらして身をすくませる。目をつむった。嗚咽も一緒に無理矢理口を閉じた。ぼくは何も言わない。息も吸わない。鼻も利かない。何も聞こえない、ここはどこだ？ 自分の部屋だ、僕の家だ、いつも通りだ、これは夢だ。

しかしぬるついた切っ先を頬に感じ、チャックはすぐに腰を浮かしかけた。脂汗が浮く。むき出しの傷口を押し付け、アンは笑った。

「ゆーびきーりげんまーんウソついたあゝら針千本のおおおます
う……ホラ、ナイシヨの約束よ？」
そして冷たく言い放つ。

「動くな」

「ひっ……」

「動くとアンが、死んじやうよう……？」

「ヴヴヴ……」

チャックがテコでも瞼を閉じるつもりなのを見届けると、アンは
またチャックの顔についた血を舌で舐めとり、体を起こした。

「あした、キミがあたしを殺さなかったら、また来るね」

これが、二月前のことである。

本の国：盲者の道化

視点B：

そこは白い部屋だった。

六角形をしたその場所は、交互に三面が鏡張りになっており、残りの三面がやたらと染みのない、真っ白けなのだった。天井も白く、床は鏡張り。照明は白壁自体が発光しているように見える。足の下に影は出来ず、周囲には白い空間に自分の分身だけが見えた。

エリカは瞬きの瞬間に飛び込んできた、一面の純白にたたらを踏んだ。足元さえ（文字通り）雲をつかむようで、二度三度の足踏みがおぼつかない。

「……七島さん？」

部屋にエリカの声が吸収される。

その返事は、思いがけないところからやってきた。

「それは誰のことだ？」

のっそりと、その男は部屋の隅から立ち上がった。

長身痩躯、白い服、床に着くほどの真っ白い髪、青白い肌。老人かと錯覚するが、顔立ちは若々しい。瞳が閉じられていた。その下は、髪と同じように白いのかもしれない。

盲者だ。

エリカは答えた。

「……銀髪の、子供みたいなかつこうのんです。黄色の服を着ているの」

「ああ、それは管理人だ」

「管理人？」

男は、閉じた瞼をわずかに開いて弧を作った。

「世界と世界をつなぐ道、世界と世界の出入り口を見守る管理人さ。あの子は世界の全部を傍観している。全ての異端者は彼女の前を通り、彼女の視線の下に晒される。星より多い八百万やあふすの世界でただ一人、異端者と登場人物の区別なく見つめるだけの監視員。

だから管理人さ。あれには基本的に名前が無いからね、適当に気に入った名前を名乗ったんだろう」

唇を釣り上げて朗々と語った男は、『困ったもんだね』と芝居がかった姿で肩をすくめた。

「ここは私の私室なもんでね。勝手に誰かさんを連れてくるなんて……彼がこんな愉快犯な男だとは知らなんだ。

ああ、君が責任を感じることは無い。そんな顔はしないでくれ。加害者は彼、君は被害者。これは明瞭とした事実関係だ。そしてこの、私も被害者さ。

——さて、かわいそうな迷子の御嬢さんを、きちんと、この、僕が。案内して差し上げようじゃないか」

さらに男はエリカに礼をした。右手を差し出されたが、すかさずエリカは三步半、後ろに下がる。

ちなみに『そんな顔』とは、眉間に溪谷を刻み、半目でねめつけた——例えるなら、違法駐輪のドミノ倒しに巻き込まれた歩行者の、自らの小さな不運を嘆き、憤る、あの顔である。要約すると。『うわあ、めんどくせえ』

「……ごめんなさい。とっても魅力的なお誘いだけれど、わたし、お断りしたい気持ちなの」

「それは実に……実に残念だ。しかしね、キミはこの部屋のことは存

じ上げないだろう？

実はここは特注の設計でね、この部屋に扉は見当たらないだろう？ これは実はこの六面すべてが扉になっていてね、一度出口が開くとランダムに次の出口が変わる仕様になっている。間違えた先にも道があるが、その先が正しい道とは限らない。まあもちろん、僕には正しい出入り口は明確だけれどね」

「……………ごめんなさい、わたし、ちょっと気をつかつちやったわ。そんな必要のないのにね。あのね、わたし、変な人にはついて行くなっって言われてるの。特に、知らない場所で親切をチラつかせて余所へやろうとしてる男の人とは、口もきくなっって言われてるわ」

「ああ、『知らない場所』で『親切』で、『よそへやろうとしてる』？ ハハハ、ぴったり僕のことだ」

「そうなの。本当は口もきくなっって言われてるのに…………。これ以上は残念だけれど、あなたと関わるわけにはいかないわ。だってあなたが良い人だなんて…………わたしにはわからないもの」

「ハハハ、キミ、デリカシーって知ってる？」

「わたし、子供には嫌われてるけど大人には好かれるのよね」

「クソガキって言われたことは？」

「あら、『お口が上手ね』って言われるわ」

「……………」

男の顔が云っている。『うわあ、めんどくせえ』

「僕は道案内に向かないようだ。君の要望はなかなか難しい……。案内人をつけよう。偶然だけれど、もう少しで訪問者が来るはずなんだ」

本
の
国
：
自
隠
し
の
子
供

チーン

すぐ横の鏡から発せられた機械合成音に、エリカはギョツとして身をすくませた。

「あっ はははははははははははははははははははははは、ひひひひひひひひ、あ、ありやエレベーターだよ」

「エレベーター？」

「君は、そんなものも無いところから来たのかい？」

無音で扉がスライドした。中には一人――

背景に同化する白髪、青白い肌、思わずエリカは男を振り返った。違いは襟首にかかるほどの短髪であること、着古し、着こんだ上着にマフラーという外出着、何より、エリカより少し年高の少年であること。――目元にすっぽりと布を巻いて双眼を覆っていること。

エリカはしげしげと二人の間を見比べた。

「……親子？」

「違います」

少年がなめらかに即答した。

「ちようどかったね、彼も今帰るところだ。彼と一緒に上へあがればいい。この真上が君の行きたい物語管理局の夢人常駐本の国支部さ」

「本の国？」

「そう！　ここは本の国。本の一族が住まい、異世界人が文明開化した異端の地。そしてこんなところに在住の僕は、物語管理局局長、ロメロ・パスカル・ミル・エラ・ピーター・アンジュ・アントン・

S・Z・ミアロ・二世……覚えたかい？」

「へえ……」

見事な棒読み、生返事。

少年が明らかに困惑して、そろりとエレベーターのボタンに手を伸ばした。すぐにでもこの場から逃げ出せるようにである。

ロメロ・ミアロは偉かった。その地位、影響力を知るのは、この場には孤独にも、不幸にも……彼のみだった。

「……ふつ、まあいい。この世界にいる限り、長い付き合いになるだろうさ。ほら、早くこんなところからは出て行ったほうが懸命だ」
そう言ってロメロ局長は、エリカの肩をエレベーターに向かって突く。よろめいたエリカに、トランクを押し付けた。重みで彼女は床に潰れた。

あわてて少年がトランクをエリカの上から持ち上げ――
彼女が顔を上げると、閉じる扉の一瞬に、満面の笑みで手を振るロメロの姿が見えた。

「……とんでもないわ」エリカが呟く。

少年の溜息が、空しく小部屋の中に響いた。

彼はエリカの手を取り、抱き起し、コートの埃を払ってやった。

トランクを起こした少年の仕草を見て、エリカはふと思う。

「その目隠し、前は見えているんですか？」

「見えてますよ。見えないようにするものではなく、『見せないように』するためのものですから」

「……見せないように？」

「すぐにわかりますよ……邪魔なら取りましょうか」

「ええ、視線が分からないのはちよつと嫌なもの。そうしていただけると嬉しいです」

少年は布を取って見せた。幅広の鉢巻の様な布である。冴え冴えとした碧眼が現れた。

「綺麗ですね」

「え？」

「目の色がきれいですねって言ったの。……そんなビックリ箱に引っ掛かった時みたいな顔するようなこと言ってたかしら」

彼は首をすくめてうつむいた。

「……あまり言われ慣れてなかったなので、少し驚きました」

「そんな馬鹿な話があるもんですか」

「ホントウです……」

少年はマフラーの下に鼻から下を潜らせた。

「わたし、エリカっていいいます。あなたのお名前は？」

「ビス」

「よろしくお願いします」

「……上についたらすぐですから」

ビスは寒くもないのに、マフラーを巻きなおして扉脇のボタンの方を向いた。エリカより着こんでいるというのに、酷く青白い顔色だ。

「どこか体がお悪いの？」

「……いつも貧血気味だけです」

ビスはとことん居心地が悪そうに、視線を逸らして扉を凝視する。

チーン

到着の音に、ビスはようやく上がっていた肩を下ろした。

物語管理局のホールは、半円の形をしていた。

エレベーターを待っていたらしい、奇抜な緑色の長い髪をした男がギョツとして、現れた黒白の子供二人を見やる。ビスは男に小さく目礼し、エリカをホールの受付脇まで引っ張った。

ビスは声を潜める。

「ここで待っていてください。後で迎えが来るはずです」

「あなたは？」

「……僕は、あの……」

ビスは青白い顔をさらに青くさせて、一度口をつぐんだ。

「…実は、僕もこの後用事があって……久しぶりに家族と会うことになっているんです。兄が迎えに来て……」

「なら仕方ないわ……ごめんなさい、引き止めて」

「いいえ」

またビスは瞳を伏せる。躊躇いがちに彼は別れの言葉を口にした。

「えっと……あの、さようなら」

「ええ、じゃあ、また逢えたら」

「……はい、また逢えたら——」

振り向きざまに小さくはにかんで、ビスは小走りにホールを出口まで突っ切っていった。

彼とすれ違いにこちらへ向かってきた少年が、ビスの姿にあわてて道を空ける。彼が通ると、さながらモーセが杖をかざした海のように、人々が道をあけて距離を取る。

エリカは、ようやく先ほどまでに向けられていた周囲の視線に気が付いた。

視線は悪意だ。

その悪意はすべて、あのビスに向けられたものだったのである。

本の国：ニル

『異端』とは、学説・思想・宗教などが、正統と定められたものから外れていることである。

つまり、度を越したマイナー主義主張によって、大多数から糾弾を受ける少数派のことと言える。

『異端』なる言葉は、しばしば差別を表現する言葉として使用されるが、『異端』自体は差別用語とは微妙に違う。

例えばの小話。

『タケノコが一番おいしい』と掲げる街に、『キノコが一番おいしい』と言う一家が引越してきた。

一家は当然の様にスーパーでキノコを買う。当然の様にそれを食べる。訪れた客のお茶菓子もキノコである。

一家は主張する。『キノコが一番うまい』。

しかし街の住人、『タケノコの方がおいしい』。

いくら一家がキノコの良さを語ろうと、長年タケノコ派閥として食べ続けてきた住民たちは取り合わない。確固たる信念で、味覚さえ捻じ曲げて見せる。

はぶれた『キノコ派』一家、ここで初めて【異端者】と呼ばれるようになる。ちなみに僕はタケノコ派である。

外はどんよりとした灰色の空だった。風は冷え切り硬く、澄みきっている。僅かに道の端に雪が積まれ、溶けかけて凍り付いていた。管理局は外から見ると、縦長の洋館風の建物だった。しかし外に出ると、泥で塗られた白い塀、窓の装飾や道端の石で出来た置物、

そのほかの建造物は屋根に瓦が乗っかっていたり、漢洋折衷した風情である。

「本の一族って言うのは、この管理局がある世界の先住民族なんだ」黄色の瞳をした少年は、相応の幼い凡庸な顔立ちに似合わず、読み上げるようにスラスラとこの世界についての説明を並び立てた。

「僕ら【本の一族】の能力は、『すべての力の増幅』。肉や体液は万能薬にして不死の薬っていうんで、千年くらい前に異世界人からの侵略を受けて、人口は30%まで低下した。現在は、この世界の住民丸ごと管理局じきじきの保護を受けてる。その変わり本の一族は管理局に、能力貸しますよ、っていう条約を交わしてるんだ。――

――そこかしこに、髪や瞳が色鮮やかな人たちがいたろう？それが全部、本の一族だ」

赤、青、緑、紫、黄、桃、橙――そう言う少年は瞳こそ黄色だが、背中に太い一本の三つ編みで垂れる髪色は、ありふれたこげ茶色である。むしろこの一族内では珍しい色なのかもしれない。

「けど驚いたな。早々、僕が行く前に、禁忌の子なんかと一緒にいたから――え？禁忌が何かって？……うーん、こんな往来で話すことでもないんだけど内容が無いようだし……わわ、いいいいよ、話すよ。……エリ力ちゃんって、知りたがりなんだねえ……ま、いいけどさ。迷惑じゃないよ、うれしいくらい」

少年ははにかんだが、その表情はエリ力の年と変わらなく見えた。ここに来てから、年齢不詳の人間に会ってばかりだと思う。うち二人は、若年寄り。うち三人は、若白髪。一人は銀髪だったけれど。「ほら、良く見てみなよ。白い人はいないだろう？そう、言葉通り、白い頭に白に準じる色の瞳の人のことだ。僕らは男も女も長髪が慣例だ。けれど年を取って白髪が出てくると、頭を綺麗に丸めるっていう慣例もあるってくらいには白髪は忌まれてるんだよ。

白髪だから禁忌なのかって？いいや、違うさ。本の一族に白髪が生まれる時、それは『別の種族との姦淫』を意味するんだ。『姦淫』

の意味？ …うんと、ようするに、本の一族以外と生まれた子供
つてことさ。この世界で言う『他の種族』は、異世界人のことだか
ら……僕は奴隷の歴史があるから、余計に忌むべきものだ。

『白』い色を持った一族は、今三人しかない。一人は今の管理局
長、ロメロ・ミアロ。あとの二人は、管理局員とところに生まれ
た、ケイリスク兄弟。つて言うとき、すごいことだろ？ だって一
人は、実質この世界の権力トップなんだ。この世界に生まれても、
姿すらそう見ることはできないだろうね。

……さつき君と一緒にいたのは…ケイリスク兄弟の次男坊のほう
かな。名前は…そう、それ。ビス・ケイリスくだ」

この少年、本の一族のニル少年は、黄色い瞳に茶けた髪の自称1
歳の少年だった。『自称』というのは、やけにこのニル少年、物
腰が穏やかで年相応に見えないためである。外見はむしろ、反比例
するように小枝の様にちっぽけで、赤ん坊のみたいに大きなドン
グ
リ眼の男の子なのだが。

彼の家は数代続いて管理局に関連した職種に就いており、両親も、
彼の成人した三人の姉も、二番目の姉の婿も、20年前までは祖母
も、何らかの職員である。特に何かあるというわけでもなく、それ
えぞれの選んだ職種が、それぞれ管理局関連に、という偏った一家
だった。

末っ子長男の彼もまた、この年で管理局の資料室で文芸員見習い
として勤めているのだという。仕事内容は主に資料整理――

彼は、生粋の本の虫だった。

その縁あつてか、一人で生活するには苦しいエリカの下宿先が、このニル少年の実家なのである。

「管理局に勤めてるのは、何も異世界人…君たちで言う、『異端者』？ だけじゃない。僕ら一族の人間の方が、職員としてはむしろ多いと思う」

「そうなの？」

「うん。確か、異端者の発生率は60億人に一人の確率だったかな？」

ちなみに地球の人口は、2012年現在で、約70億人である。

「それって、親から子供に遺伝はするのかしら」

「うーん…するんじゃないかな？ だって、異端者って、世界の筋書きに描かれないから、世界に弾かれるんだろ？ なら、その子供が生まれたって筋書きには無いじゃないか」

本の国：悲劇の男の噂

> i 3 7 9 7 0 — 1 5 7 <

視点C：

「ダイモン・ケイリスクつつつてもなあ…俺は仕事丸投げして、ほつぽつてきたただけだぜ？」

「ふん、役立たずめが…まあいい。ハナからさして期待はしとらんさ。むしろこつちが本題だ。情報を提示しよう。その無駄にデカい頭で見解をよこせ」

ミゲルは内心驚いた。トム・ライアン。この元上司、今まで散々ミゲルをこき下ろしておいて、重要な管理局不祥事案件の情報提示をするほど自分を信頼していたのか？

ミゲルは胃の少し上を押さえたくなつた。

（…しかも見解をくれたと？ふざけんな。上司部下のときゃ、デスクに触るのにすら嫌がつたじゃねえか）

むず痒い口元を必死で引き締める。

しかもこの上司、いかにも不審そうに言いやがるのだ。

「…どうした？何か気が付いたことでもあつたか？」

「……………いいや、こちらら疲れが溜まっててなあ……………そんだけだ」
そう、これは疲れである。きつと一皮下ではこの男、自分を心底見下してはほくそ笑んでいるに違いない。

疲れているから、いつも通り見抜けないのだ。

「んで？ 俺が奴さんについて知ってんのは、そうそう多くないぜ？」

「まあそうだろうな。ダイヤモンドについての情報は操作されていたようだから」

「情報操作だあ？ 権力にや使うのも使われんのも無縁なヤツに思えたがな」

「演技の可能性は？」

「あのド天然が演技ってんなら、あいつに羞恥心つてのは無いんじゃないか？ とにかく不器用、可愛く言えばドジっ子ってやつ」

「おい、可愛く言う必要がどこにあった」

「うるせえよ、言葉のあやだ」

「……ふん。しかし、それはそうだろうな。そんなもんだろう。さて、では大衆代表として、お前の知ってる噂とやらを聞こうじゃないか」

ダイヤモンドケイリスクについての噂。いや、もはや公然の秘密か。大きく口には出さないが、みな知っていること。噂する大半は、ダイヤモンドの顔すら覚えてやしないのだろう。

「パートナーの本の一族の女に禁忌の子を孕ませた。もしくは、出世街道から外れた甲斐性なし。ミスターKY、宴会に呼びたくない男、浮気相手がそこかしこに大量にいるやら、ロリコンシヨタコンの変態やら。逆に、本の一族との禁断の恋に生きる男。不遇な運命に翻弄される悲劇の人。実は親に捨てられた禁忌の子供を内々に育てているだとか、孤独な一匹狼とかいう眉唾なモンばっかだな。まあ共通してんのは、本の女と禁忌の子を養ってるところか」

「ふむ。真実六割、悪意四割といったところか」

「悪意？ウソじゃなく？」

「悪意があるから、嘘もつくんだろうさ……やれやれ、情報操作と

いつでも大したものではないな。所詮そんなものか……。いいか、真実は、本の妻が居ること、子供は息子二人いること、出世の見通しが無いこと、あとは……まあ、ある意味で不遇な運命に翻弄される悲劇の人物やらのところか」

トムはしばし黙り込んだ。

「よし、ではダイモンの妻の素性からだ。知つての通り、本の一族は我ら管理局に保護を受けている。その見返りとして本の一族が提議してきたのは、人材の提供……ひいては能力の提供だ。守られているだけでは割に合わんということだな。奴隷の歴史があつたからこそ、自立を求めた。

『力の増幅』なんていうこの一族の能力は、きわめて万能だった。オーソドックスな身体能力強化、免疫と細胞強化による治癒、魔力や超能力といった、超自然的な能力の強化にもきく。

それによつて、夢人は本の一族と連携を取り、二人一組のコンビを組んで任務を行うパートナー制度を取り入れることが出来た。

本が一人傍にいれば、無敵とは言わずとも、ただでさえ少ない職員らの生存率にも繋がる。【帰還】のボタンを押せるやつがいれば、死体でも回収できる。しかしこの制度のタブーが、【パートナー】同士が仲良くなりすぎること】だ。ロキ——ダイモンの妻、ロキ・ケイリスクは、ダイモン・ケイリスクのパートナーとして採用された女だった」

トムはまたファイルを投げてよこした。本の一族特有の鮮やかな色彩、曇りのない青い髪、同色の双眼を併せ持った、色白の本の一族の少女が映っている。

『青』なんていう、生物に最も遠い色彩の髪色だからか、さらにはこんな書類の写真だからか、ずいぶん表情が乏しく見えた。

特徴的なのは、髪。真っ青な髪は、肩よりも短い。

「……髪が短いな」

「そう。彼女は、本の一族の異端児だった。彼女、ロキの生まれは一族内の有力者。族長の一人として数えてもいい権力者のお姫様だ。……しかし、高貴な生まれというそれ以上に通りが良かったのは、天才薬師、研究者、『稀代の変人口キ』だ」

本の国：変人口キ

「彼女は十代の初めから、神童として、一人の研究者としても期待される人物だった。父親は彼女の一遊び場（研究室）として、離れを与えた。

彼女はそれをいっになく喜び、普段の生活には子供らしからぬ淡泊さを出す娘に困り果てていた周囲は、たいそう安堵したんだそうだ。

彼女は研究室に引きこもり、何かやりだした。一週間たつても出てこない。扉を叩いても、食事は受け取るが姿は見せない。仕方ない、ならばと父親は離れの水を絶てと命じた。そして水道が絶たれて二日、ふらりと離れから出た彼女は、離れを爆破した。彼女の主張はこう。『高温状態での反応が見たかった』。ちなみに全壊だったそうだ」

「当時何歳だった？」

「十歳ちよつとだ……で、だ。離れと言っても広大だ。それが全壊した有様に、ロキは父親から謹慎を受けた。しかしまあ、才能は本物だ。研究をするにしては設備が足りなんだ、その結果だという、周囲の声に、仕方なく今度は別荘を改築して与えた。………実際、爆破実験から結果は出てしまっただね。私もそつち方面には明るくないのだが、画期的な効能の胃薬が出来たらしい。

しかし別荘も、三月で爆破……これは屋敷の規模が大きかったので半壊で済んだ。

しかし二度の爆発騒ぎが決定打になり、彼女は14歳で勘当された」

「親もさじを投げるわなそりゃ。どちらかが悪いとも……いや、教育の責任で親が悪いのか？」

「どちらとも言えんな。彼女の興味と欲求の矢印は研究に一本線だった。髪は伸びっぱなし、風呂には入らん、実験中は寝もしない。かと思えば、一族象徴たる髪をばつさと切る。奇行の目立つテンプレートな天才だ。悪かったのは学問を彼女に与えたことだ。」

勘当された彼女は、幼くして長屋住まいになったが、ある日また事件が起こる。長屋が半分、地面に沈んだ」

「ヴウン……」ミゲルは眉間を抑えて唸った。

そんなテンプレな天才がこの世にいるものか、と思うのだが、本人の写真という存在の証拠を出されている以上は、何とも言い難い。どこまでがウソか真か。分からないから、トムは『伝説』などと言ったのだろう。

この淡泊な風に見える少女の一枚絵が、むしろ彼女の個性の塊にすら思えてきた。

「……また爆発か？」

「いいや、薬を保管する地下室が欲しかったんだそうだ。それで長屋の床を剥いでいいかと大家に訊いて、機材を持ち込んで半年かけて、隣近所三棟にわたるトンネルを掘った。すると地盤沈下により、長屋の半分が落ちた。……大家はリフォームだと思ったんだそうだ」

「……………」

「そんなふうには彼女は住まいを転々としたが、しばらくして管理局の研究機関のほうから『住居を提供するから研究に専念してくれ』と、住まいと安定した職を手に入れる。そして21の時、彼女はダイモン・ケイリスクに出会った。」

その頃、彼女の興味の矛先は、本の一族の能力と異端者の体にあった。そこで、自ら局に夢人のパートナーとしての登録をし、異端者とコンビを組んで本の一族としてのサポート任務にあたった。そのパートナーがダイモンだったんだが、彼らはその後すぐに事実婚の上で、長男をもっている」

「そんな女なら、禁忌の子をこさえるのも分かる気がすんな」

「チツ、チツ、チツ、」トムは首を振った。

「浅はかだな、ミゲル・アモ。『彼女だから』疑問が残るのさ。学者、研究者、それ以前に、彼女は薬師——医者なんだ。命をこさえるリスクの高さ、それを誰より知っている」

「下せねなあ……だってコイツは、医師以前に変人学者だぜ？一人でトンネルこさえる女だ。ありえねえわけじゃないと思うがね。俺が彼女のこんなトンデモねえ話を、これっぽっちも耳に入れてねえってことは、情報操作つてもロキの父親が娘についてのあれこれを、圧力かけて規制したってこつたる？」

「そこはそうだな。もともと大して出世するような男には思えないが、ダイモン・ケイリスクが出世できなかったのも圧力がかかっていたからだ。20年も勤めていれば、普通なら少しは名が付くものだがね」

「もしかして悲劇つてのはそこか？」

「……いいや、悲劇つてのは、悲惨な最期と相場が決まっているだろう？ 先日のアン・エイビー事件同日、ダイモン・ケイリスク宅から爆発があつたのは知っているか？」

「ああ、あつたなあ爆発。それがダイモンの——」

「そう。死亡者は、ティーンエイジャーの頃に二度の爆発を起こして涼しい顔をしていたロキ・ケイリスク。事が終わって、現場には息子二人がいたが、外出していて無傷だった。」

——しかーしだ、ミゲル・アモ。ダイモン・ケイリスクの死体はどこにあつたと思う？ 街の郊外、管理局の東、裏のあぜ道の脇に、管理局の白い塀にもたれるようにして倒れているのを発見された。失血死だった」

「そりゃ、ビミョーに不審だな」

「いいや、決定的に不審死なのはなあ、ダイモンの死因が、『左目をくり抜かれたことによる失血性パニック死』だったことなんだよ」
重低音で言い放ったトムに、ミゲルは身を乗り出した。

「さらに残った右目はすでになく、その傷跡には見るからにはつきりとわかる治療痕……さーらーに！その『治療されていた右目』の中身、眼球が見つかったのは、ケイリスク家爆発跡だ。
………どうだ？見るからに不審死だろう？」

男たちの背筋が伸びる。血が冴える。
体の芯から冷え込む、年終わりの夕方のことだった。

（C視点：12月27日　了　）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2685s/>

IRREGULAR 《違法異世界旅行者異聞録》

2011年12月31日22時27分発行